

み とおし い せき

美通遺跡 D 区

一般国道139号（都留バイパス）改築工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

2012.3

山梨県教育委員会
国土交通省 関東地方整備局



美通遺跡D区調査区 南側上空からの空中写真



美通遺跡D区調査区 北側上空から 背後は生出山



美通遺跡D区調査区全景



美通遺跡D区調査区近景

美通遺跡D区のあらまし



美通遺跡は、山梨県都留市井倉にあり、都留バイパスの建設工事に伴って発掘調査を行いました。D区はその北東部になります。D区の調査では縄文時代前期のドーナツ状に石を並べたところから土器などがみつかりました。



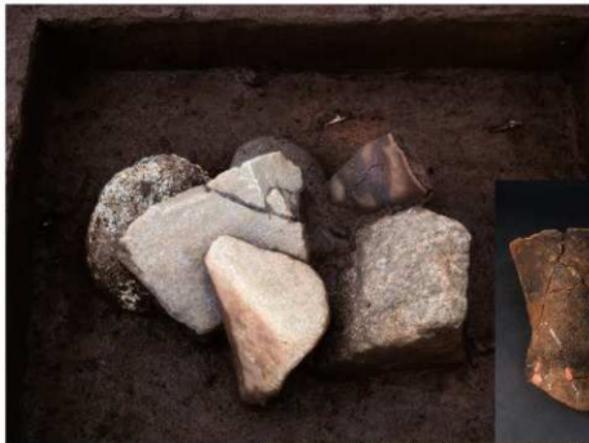
調査区内からは約1万点にものぼる石が幅6m、直径25mのドーナツ状に出てきました。石に伴って縄文時代前期の土器片ややじりなどの石器がたくさん見つかりました。



石に混ざって土器がたくさん出てきます。

なかには石をみがいてつくった耳飾りもありました。





ひとかかえもある大きな石がまとめてあり、いっしょに縄文土器が埋められていました。おそらくお墓であったと思われます。



縄文時代に石をたくさん集めてある小さな穴です。石焼き料理につかったものと思われます。こうした跡は美通遺跡でたくさん見つかっています。



この穴からは弥生時代の土器がたくさん出てきました。これもお墓と思われます。美通遺跡では縄文時代から弥生時代、古墳時代、中世など断続的に生活をしていたことがわかります。

序 文

本書は一般国道139号（都留バイパス）改築工事に伴い、平成20年度から行っております美通遺跡の発掘調査のうち北東部端となるC区に隣接するD区の調査報告書です。D区より先は九鬼山の裾にあたる朝日川の断崖となっています。A区からC区につきましてはすでに発掘調査を完了しており平成22年度に調査報告書を刊行したところであります。

美通遺跡は、北側で合流する菅野川と朝日川に挟まれた河岸段丘上に位置し、弥生時代の遺跡として知られる生出山の北側にあります。

調査の結果、縄文時代の包含層は斑状土層のため集石土坑の他に明確な遺構は検出できませんでしたが、大量の礫が幅約6mで直径25m程の環状を呈するように土器と共にみられました。この礫は粗密をもちらながら縄文時代前期後半の諸礫a式土器が伴い、このほかに石鏃や石匙、石皿等の石器がみられました。特殊なものではほぼ全形がわかる滑石製の玦状耳飾りが出土しました。焼土を8箇所検出しましたが、周囲の遺物出土状況から住居跡に伴うものと判断することはできず、いまのところ縄文時代前期の諸礫a式期に形成された環状配石と考えています。この他に縄文時代早期の条痕文土器、前期諸礫c式土器、後期称名寺式土器などがわずかにみつかっています。

また、縄文時代より上層のスコリア粒を多量に含む土層からは弥生時代の遺構が検出できました。弥生時代は、土坑が12基とピット群を検出したうちの一部の土坑から弥生時代中期初頭の壺、甕片が出土しました。中世の遺構・遺物は、溝状遺構から陶器片が出土したとの包含層より古銭が見つかった程度であり、明確な文化層を形成していないようです。

これまでのA区からC区の調査結果とはまた少し異なった様相が明らかとなりました。既刊の『美通遺跡A・C区』、『美通遺跡B区』の発掘調査報告書（2011.3）とともに本書が、遺跡周辺および地域、本県の歴史・文化財に関する学習や研究において、貢献できることを祈ってやみません。

最後に、国土交通省関東地方整備局をはじめとする調査にあたってご協力いただいた関係者、関係機関に厚く御礼を申し上げます。

2012年3月

山梨県埋蔵文化財センター

所長 平賀孝雄

例　　言

- 1 本書は、山梨県都留市井倉に存在する美通遺跡D区の発掘調査報告書である。
- 2 本書は、国道139号（都留バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査であり、国土交通省関東地方整備局より山梨県教育委員会が委託を受け、山梨県埋蔵文化財センターが調査を実施したものである。
- 3 発掘調査および整理作業は山梨県埋蔵文化財センターが行った。
- 4 本書の執筆・編集は今福利恵、土橋寛仁がおこなった。
- 5 発掘調査・整理作業及び本書の刊行にあたり、測量基準点を昭和測量株式会社に、遺跡の空中写真を株式会社東京航業研究所に委託し、遺構遺物の測量及び図化には株式会社テクノプランニングの「遺構くん」を使用した。
- 6 遺跡における遺構・遺物の写真是今福利恵、土橋寛仁が行った。また遺跡の空中写真是株式会社東京航業研究所撮影の写真を使用した。
- 7 本書にかかる記録図面、写真、出土遺物等は山梨県埋蔵文化財センターに保管してある。
- 8 調査にあたり、次の方々からご教示、ご協力をいただいた。記して謝意を表する。奈良泰史　守屋雅幸　平出一治　土屋積　都留市役所　都留市教育委員会　帝京大学山梨文化財研究所　大月警察署　長野県立歴史館

凡　　例

- 1 遺構・遺物図面の縮尺は図中に示した。基本土層1/50、遺構は1/40、但し配石は1/60、遺物については1/3、石器等で微細なものは2/3、他1/2、1/4としている。
- 2 遺構番号は、D区内で通し番号とした。
- 3 調査区内は世界測地系座標に基づく5m四方のグリッドを設定し、A区からC区における過去の調査と整合性をとるため連続するようにグリッド名を付した。また全体図におけるX・Y軸延長線上の数値は座標線の数値である。よって南北のグリッド線及び図中の北印は真北を指す。
※『美通遺跡A・C区』のC区全体図のグリッド配置に誤りがあったため、連番としたがD区の16、17列のグリッド名は、実際にC区の16、17列と重複する。C区とD区で重複する16、17列のグリッドは異なったものである。
- 4 遺構図版中のドットマークや出土遺物に付した番号は、遺物図版の番号に対応する。
- 5 遺構断面図の右側基点に付した数字は標高(m)を表す。
- 6 図版中に示したスクリーントーンは以下の内容を示す。
 - 焼土、■織維、■須恵器・陶器
- 7 遺物観察表の括弧付き数値は推定値である。
- 8 本報告書中で使用した地図は、国土地理院発行の1/25,000地図を利用した。

目 次

巻頭写真図版

あらまし

序文

例言・凡例

目次

第1章 調査の経緯と経過.....	1
第1節 調査に至る経緯.....	1
第2節 調査の目的と課題.....	1
第3節 発掘調査の経過.....	1
第4節 室内調査の経過.....	1
美通遺跡D区にかかる手続き等.....	1
調査組織.....	2
第2章 遺跡の位置と環境.....	3
第1節 地理的環境.....	3
第2節 歴史的環境.....	3
第3章 調査の方法と成果.....	7
第1節 発掘調査の方法.....	7
第2節 基本層序.....	7
第3節 発見された遺構と遺物.....	7
遺構図版.....	14
遺物図版.....	31
遺物出土状況図.....	60
土器観察表.....	66
石器観察表.....	68
第4章 総括.....	69
写真図版	

図 版 目 次

第1図 美通遺跡と周辺の遺跡	5	第32図 出土遺物 繩文時代前期 (11)	
第2図 美通遺跡調査区位置図	12	配石F14.15.16	42
第3図 美通遺跡D区周辺地形図	13	第33図 出土遺物 繩文時代前期 (12)	
第4図 美通遺跡D区グリッド配置全体図	14	配石F17.G15	43
第5図 D区全体図 (1)	15	第34図 出土遺物 繩文時代前期 (13)	
第6図 D区全体図 (2)	16	配石G14.16	44
第7図 D区基本土層	17	第35図 出土遺物 繩文時代前期 (14)	
第8図 配石 DE13.14	18	配石G16.17.H15	45
第9図 配石 E15	19	第36図 出土遺物 繩文時代前期 (15)	
第10図 配石 FG16.17	20	配石H16.I15	46
第11図 配石 GHII15.16	21	第37図 出土遺物 繩文時代前期 (16)	
第12図 焼土 集石 集石土坑	22	配石I16 諸磯c	47
第13図 土坑 (1)	23	第38図 出土遺物 繩文時代前期末 中期	48
第14図 土坑 (2)	24	第39図 出土遺物 繩文時代後期 晩期	49
第15図 溝	25	第40図 出土遺物 弥生時代 (1)	50
第16図 ピット群 (1)	26	第41図 出土遺物 弥生時代 (2) 古代・中世	51
第17図 ピット群 (2)	27	第42図 出土遺物 繩文時代石器 (1)	52
第18図 ピット群 (3)	28	第43図 出土遺物 繩文時代石器 (2)	53
第19図 ピット群 (4)	29	第44図 出土遺物 繩文時代石器 (3)	54
第20図 ピット群 (5)	30	第45図 出土遺物 繩文時代石器 (4)	55
第21図 出土遺物 繩文時代早期 (1)	31	第46図 出土遺物 繩文時代石器 (5)	56
第22図 出土遺物 繩文時代早期 (2) 前期 (1)	32	第47図 出土遺物 繩文時代石器 (6)	57
第23図 出土遺物 繩文時代前期 (2) G15集石	33	第48図 出土遺物 繩文時代石器 (7)	58
第24図 出土遺物 繩文時代前期 (3) 配石D14.E13	34	第49図 出土遺物 繩文時代石器 (8)	59
第25図 出土遺物 繩文時代前期 (4) 配石E13	35	第50図 遺物出土状況 繩文時代早期前期諸磯a	60
第26図 出土遺物 繩文時代前期 (5) 配石E13.14	36	第51図 遺物出土状況 繩文時代前期諸磯a配石 (1)	61
第27図 出土遺物 繩文時代前期 (6) 配石E14	37	第52図 遺物出土状況 繩文時代前期諸磯a配石 (2)	62
第28図 出土遺物 繩文時代前期 (7) 配石E14	38	第53図 遺物出土状況 繩文時代 碲・石器	63
第29図 出土遺物 繩文時代前期 (8) 配石E15	39	第54図 遺物出土状況 繩文時代前期末 中後晩期	64
第30図 出土遺物 繩文時代前期 (9) 配石E15	40	第55図 遺物出土状況 弥生 古代・中世	65
第31図 出土遺物 繩文時代前期 (10) 配石E16	41	第56図 グリッド別石器石材重量、点数グラフ	71
		第57図 諸磯 a式土器の分類	71

第1章 調査の経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

美通遺跡は一般国道139号のバイパス建設を原因として、平成20年度より南西部となる県道35号側からA区、B区、C区と大きく3箇所に分けて発掘調査を順次行ってきた。平成22年度までには本線部分の調査を終え、都留バイパスとして道路は供用開始されている。そのバイパスが延長される北東部端で、本線から出る雨水を処理するための水路を敷設する計画があることから平成22年7月28日に試掘調査を行った。2つの試掘坑による調査結果から縄文時代の集石遺構や平安時代の土坑が確認され、これまでの本発掘調査結果と照らし合わせても美通遺跡が当該区域まで広がっていることが予想された。よってC区に隣接して新たにD区とした朝日川までの区域の調査を行うこととなった。D区より先は九鬼山の裾にあたる朝日川の断崖となっており、対岸には九鬼遺跡等が知られている。

第2節 調査の目的と課題

美通遺跡D区は、試掘調査の結果からこれまで調査が行われたA区～C区に連続するもので、縄文時代前期の集石土坑や平安時代以降の土坑が確認できている。よってこれらの遺構・遺物を記録保存することを目的とする。D区は遺跡の広がりが地形から見てほぼ北端部に位置するものであり、縄文時代の早期から晩期まで、さらに弥生時代、古墳時代、中世と断続的に生活の痕跡が確認できている。朝日川と菅野川にはさまれた細長い台地上に位置する美通遺跡における生活土地利用の変遷過程を解明していくための資料として、各時期の遺構・遺物の分布をとらえていくことを課題とする。

第3節 発掘調査の経過

平成22年7月28日の試掘調査結果を受けて本調査を実施するにあたり、平成23年4月12日に国土交通省甲府河川国道事務所、同大和出張所、施工業者、県教育庁学術文化財課、埋蔵文化財センターの五者で、調査範囲・工程の確認、調査区域や施設設置など埋蔵文化財の調査計画について現地協議を行った。発掘調査にあたり一部供用開始している部分を使用するため道路を所管している国交省甲府河川国道事務所大月出張所へ県教育長名にて平成23年4月25日付け道路上作業届けを提出し、4月27日に大月警察署交通課と協議を行った。

本調査は平成23年5月25日より重機を用いて表土除去作業を行った。試掘調査結果より実際は表土が浅く27日には表土剥ぎを完了した。6月1日から人力による掘削を開始し、翌2日には基準杭測量及びベンチマーク設置を行った。人力による掘削と並行してトータルステーションによる遺物取り上げ等の記録作業を行いながら8月29日までに調査を完了した。なお遺構精査完了に合わせてラジコンヘリコプターによる空中写真撮影を8月23日に実施した。8月29日から30日には重機による埋め戻し作業を行い9月2日までには機材・施設の撤収を終えた。

第4節 室内調査の経過

美通遺跡D区での遺物出土量はプラスチック収納箱にして18箱になり、室内における本格的整理作業を平成22年9月13日から開始した。作業内容は現場作業での図面整理及び出土遺物洗浄、注記を行い、11月28日から接合・復元を12月末までに終えた。平成24年1月6日からは出土品の実測作業を行い、並行して遺構・遺物図版の作成、原稿執筆をすすめ、2月29日までには整理作業を完了した。編集作業を進め報告書刊行をおこなった。

美通遺跡D区にかかる手続き等

平成23年4月1日付け教学文第454号にて一般国道139号（都留バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査の平成23年度締結について発掘調査受託契約書を国土交通省関東地方整備局長と山梨県教育委員会教育長

で締結。

平成23年4月25日付け教学文第369号にて道路上作業届の提出について山梨県教育委員会教育長から国土交通省甲府河川国道事務所大月出張所長へ提出。

平成23年5月25日付け、教埋文第229号にて山梨県埋蔵文化財センター所長による埋文発掘調査の報告を文化財保護法第99条第2項に基づいて山梨県教育委員会教育長へ提出。

平成23年9月5日付け、教埋文第571号にて山梨県埋蔵文化財センター所長から文化財の発見について文化財保護法第100条第2項により山梨県教育委員会へ大月警察署への通知を依頼

平成23年9月7日付け、教埋文第578号にて山梨県埋蔵文化財センター所長から山梨県教育委員会へ発掘調査の終了を報告

調査組織

調査主体 山梨県教育委員会

調査機関 山梨県埋蔵文化財センター

所長 平賀孝雄

次長 八巻与志夫

調査研究課長 高野玄明

調査担当者

調査研究課調査第一担当リーダー 今福利恵 土橋寛仁

作業員

発掘調査 天野美津子 石倉千春 奥脇光夫 斧田文夫 渡辺めぐみ 高尾和美 渡邊洋一 椿 孝二 田中奈
津代 鈴木英夫 石井 昇 遠木常久 横田夏江 渡辺久美子

整理作業 清水真弓 伊藤津真子 渡辺喜乃女 坂本幸江

第2章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

美通遺跡は、山梨県都留市井倉にて河川にはさまれた幅150m程の細長い段丘上に立地しており、遺跡東側に朝日川が、遺跡西側に菅野川が流れ、美通遺跡北側で合流し、さらに桂川へ合流していく。桂川は富士五湖の1つ中山湖を水源とし、富士吉田市域から西桂町へと谷の東側山裾に沿って北流し、都留市田原付近で谷を横断して西側山裾に沿っていく。美通遺跡の両側を流れる菅野川と朝日川はこの桂川支流で、桂川流域の東側に連なる高畠山（981m）、赤鞍ヶ岳（1,299m）、菜畑山（1,283m）、今倉山（1,470m）あたりを水源として西流してくる。菅野川は朝日川よりひとつ南側の谷を西流し、桂川とはすぐに合流せず生出山の裾をまきながら桂川と反対の西側山裾を並行している。ひとつ北の谷を西流する朝日川もしばらく菅野川の東側を並行して北流し、美通遺跡のある段丘北側で菅野川と合流する。この合流点のすぐ北側で桂川は谷の西側から東側へと流れを変えてこの支流と合流し、美通遺跡の北方にひろがる桂川流域では最大級の平坦地である大原台地の東側山裾をまきながら北流していく。以後、桂川は都留市を横断して大月市内で東流する笛子川と合流し、神奈川県内で相模川となって相模湾へと流れ出ている。桂川の流れる谷は約8,500年前に流出したとされる富士山起源の猿橋溶岩が厚く堆積している。桂川を流下した猿橋溶岩は大月市猿橋まで達しており、現在そこを流れる桂川は狭く深い渓谷を形成し、その断崖には溶岩をいまも見ることができる。猿橋溶岩は桂川やその支流にも大きな影響を与えたと考えられており、美通遺跡B区1では朝日川沿いに縄状溶岩が確認されている。周辺地域は山地と山間を流れる河川による平地に分けることができ、およそ山地が多く面積を占め、平地は少ない。

美通遺跡D区は、標高およそ412m、北に緩やかに傾斜する段丘に立地している。すぐ東側は朝日川が形成した断崖となり、河床との比高差は7mほどとなる。崖線には溶岩をみることができ、遺跡の立地基盤が溶岩であることがわかる。また朝日川の西側150mには菅野川が並行して北流しており、この川も断崖を形成し、段丘上との比高差は7~8m程度である。桂川流域は、その地形形成過程において、新期の溶岩流によってせき止められた支流河川によって溶岩流と山裾の境が洗掘や磨食などの作用を強く受けた地域であると考えられる。

更新世から含めて地形形成過程を概観すると、遺跡北側の九鬼山でのトンネル工事において貝化石が発見され、かつて海底であったことが知られている。全体として隆起を続けて極めて急峻な山地と渓谷が形成され、遺跡周辺においては石器素材となる緑色凝灰岩が採取できる。また山梨県東部地域のもう1つの特徴として、都留市南側に立地する富士山を起源とする火山灰が厚く堆積した地域であり、市域にある久保地遺跡では縄文時代中期後半の堅穴住居跡内にスコリアが堆積するなど影響を大きく受けていることがあげられる。

第2節 歴史的環境

都留市内における考古学調査・報告は戦前から行われている。大月市出身の仁科義男は明治41年東京人類学会に加わり「甲州考古余滴」という論文を著した。富士吉田市出身の羽田一成は南都留郡の考古学事情を「甲斐通信」と題して紹介し、また南都留郡下の石棒、石器などが神格化された地名を「甲斐史壇」に発表した。昭和3年には仁科義男と羽田一成が東京帝国大学編『日本石器時代人民遺物発見地名表第5版』に南北都留郡下の遺跡を報告しており、戦後の遺跡調査の基盤となった。山本寿々雄は法能天神山から耕作中に発見された敷石遺構の調査を行い、その成果を『日本考古学年報』で報告した。昭和39年には都留市教育委員会が古渡の発掘調査を実施し、文化財保護法施行以来地方公共団体が行った最初の事例として評価されている。

美通遺跡の北側にあたる小形山の中谷遺跡（第1図No24）は大正年間から知られた遺跡であり、中央自動車道建設に伴い発掘調査が行われ、また都留文科大学考古学研究会の調査により、配石遺構内から耳飾りをつけた土偶が出土し、広く紹介された。近接する大原台地でも中溝遺跡が耕地整理に伴い発掘調査され、縄文時代中期の住居跡が発見されている。美通遺跡南側にある四日市場地内の生出山（661m）の山頂（図No36）から縄文土器が出土することが知られており、昭和52年に採石工事の拡大に伴い発掘調査が行われ、縄文時代早期の住居

跡や弥生土器片、平安時代の遺物が採集された。

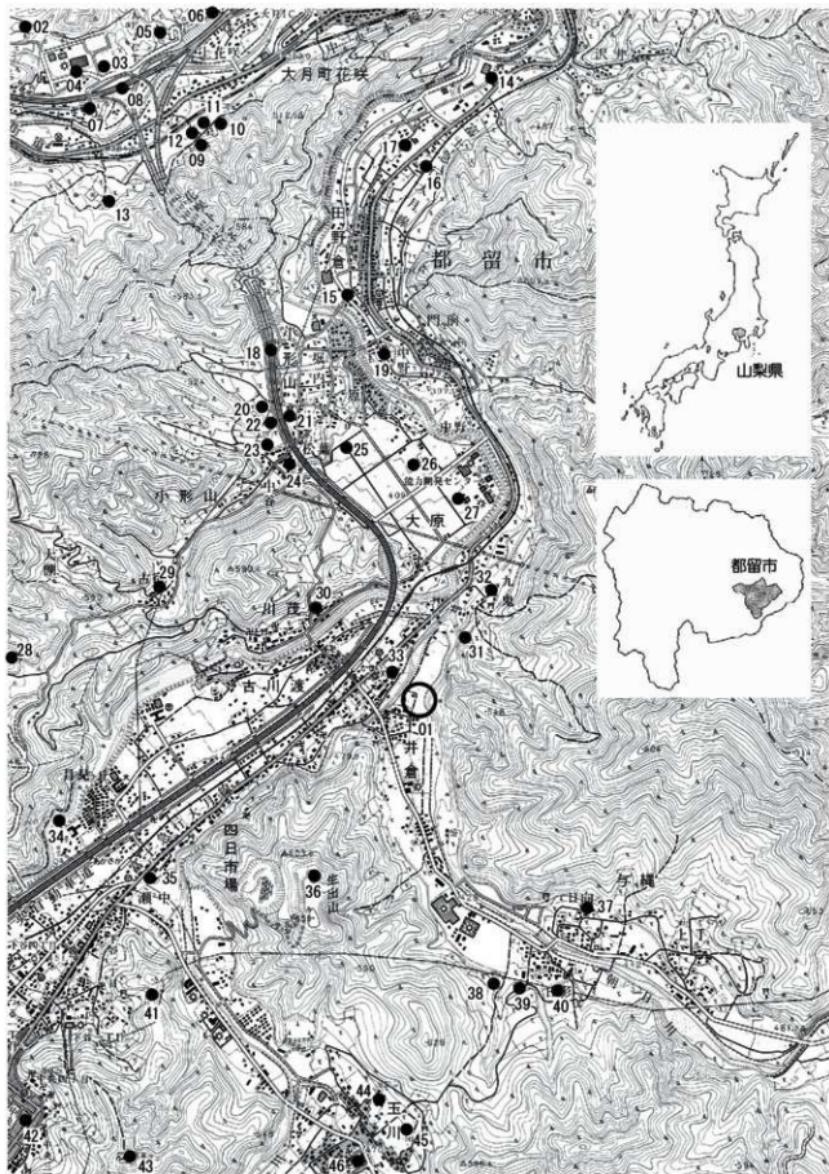
都留市域の遺跡は昭和37年山梨県教育委員会による「埋蔵文化財包含地調査」で34ヶ所の遺跡が報告され、昭和46年「山梨県埋蔵文化財包含地分布調査」では57ヶ所、昭和56年『全国遺跡地図 山梨県』では60ヶ所、平成11年度に山梨県教育委員会がまとめた遺跡一覧によると、99ヶ所の遺跡が登録されている。

美通遺跡の周辺にある遺跡で、九鬼II遺跡（No.32）はリニア実験線に伴って縄文時代と思われる竪穴住居1軒、平安時代及びそれ以降の住居跡14軒が調査された。都留バイパスに係る遺跡では、生出山東南部に連なる斜面の天正寺遺跡では縄文時代の土坑、弥生時代中期の住居が1軒、中世以降の烟跡が検出され、山を越えたところの菅野川の右岸で玉川金山遺跡が発掘調査され、縄文時代早期の住居1軒と奈良時代の竪穴住居8軒と掘立柱建物跡3軒、中世～近世の墓坑が検出された。周辺の遺跡について第1図をもとに概観すると、未発掘調査の散布地を含め縄文時代の遺跡が広く認められ、弥生時代の遺物も比較的よく知られている。

美通遺跡は、昭和10年頃の耕地整理で段丘上に水田がひろがったが、この際に土器片が採取され、遺跡が知られるようになった。この付近西側の宅地からも土器が採取され、縄文土器の押型文土器、黒浜式、諸磯c式、五領ヶ台式、加曾利E式、堀之内式、加曾利B式等が知られていた。昭和47年には都留文科大学考古学研究会部長らの発掘調査が行われ、縄文時代早期、前期、中期の土器が発見された。昭和53年には都留バイパス予定路線内における遺跡の詳細分布調査が都留市教育委員会によって行われた。井倉地区では5箇所の調査地点を選定して試掘坑をいれている。このうち美通遺跡として知られていた井倉第4地点では、縄文時代早期、前期、中期の土器を主体として土師器、須恵器など多くの遺物が出土し、かなりの時代をまたぐ複合遺跡であることが明らかとなった。調査区を拡張して遺構の検出に努めているがいたっていない。井倉第5地点での試掘調査は、本調査の美通遺跡C区に近いところであるが遺物・遺構の出土がなかった。平成19年、都留バイパス建設用地内において山梨県埋蔵文化財センターが試掘調査を行ったところ、県道と交差する部分からほぼ全線にわたり遺物が出土し、記録保存のため発掘調査を行うことになった。

参考文献

- 小林広和、山本正則 1975 「山梨県都留市・美通（縄文早期）遺跡概報」『史蹟』5 山梨史学研究会
都留市教育委員会 1973 『中谷遺跡』
都留市教育委員会 1976 『都留市の先史遺跡（上）』
都留市教育委員会 1979 『国道都留バイパス建設に伴う詳細分布調査報告書』
都留市教育委員会 1981 『中溝遺跡』
都留市教育委員会 1981 『中谷・宮脇遺跡』
都留市教育委員会 1986 『都留市史』資料編 地史・考古
山梨県 1998 『山梨県史』資料編1 原始・古代1 考古（遺跡）
山梨県 1999 『山梨県史』資料編2 原始・古代2 考古（遺構・遺物）
山梨県 2004 『山梨県史』通史編1 原始・古代1
山梨県教育委員会 1975 『山梨県中央道埋蔵文化財包含地発掘調査報告書－大月市地内2－』
山梨県教育委員会 1995 『中溝・揚久保遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第115集
山梨県教育委員会 1995 『中谷遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第116集
山梨県教育委員会 1996 『九鬼II遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第118集
山梨県教育委員会 2007 『天正寺遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第248集
山梨県教育委員会 2009 『玉川金山遺跡』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第261集
山梨県教育委員会 2011 『美通遺跡A・C区』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第274集
山梨県教育委員会 2011 『美通遺跡B区』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第275集



第1図 美通遺跡と周辺の遺跡

No.	遺跡名	種別	時代
01	美通遺跡	集落跡	縄文
02	錢神遺跡	散布地	縄文
03	原平A遺跡	集落跡	縄文・弥生・奈良・平安・中世・近世
04	原平B遺跡	集落跡	縄文・弥生・奈良・平安・中世・近世
05	西ノ上A遺跡	散布地	縄文・平安
06	後林遺跡	土坑群	縄文
07	前沢内屋敷遺跡	古墳	古墳
08	坂田古墳	古墳	古墳
09	遼郷1遺跡	散布地	縄文
10	遼郷2遺跡	散布地	縄文
11	遼郷3遺跡	散布地	縄文
12	遼郷4遺跡	散布地	縄文
13	幸ノ田遺跡	散布地	縄文
14	堰遺跡	散布地	縄文
15	横道A遺跡	散布地	縄文
16	下門原遺跡	散布地	縄文
17	横道B遺跡	散布地	縄文
18	下畑本郷遺跡	散布地	縄文
19	足ノ口遺跡	散布地	縄文
20	下畑下原遺跡	散布地	縄文
21	寺門B遺跡	散布地	縄文
22	宮脇遺跡	散布地	縄文・平安
23	中谷入遺跡	散布地	縄文・平安
24	中谷遺跡	集落跡	縄文・古墳・奈良
25	大原中溝遺跡	集落跡	縄文・古墳
26	中溝遺跡	集落跡	縄文
27	沖大原遺跡	散布地	縄文
28	大日影遺跡	散布地	縄文・平安
29	古谷戸遺跡	散布地	縄文
30	亀石遺跡	散布地	縄文・平安
31	九鬼I遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
32	九鬼II遺跡	集落跡	縄文・平安
33	前ヶ久保遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
34	横吹遺跡	散布地	縄文
35	山梨遺跡	散布地	縄文
36	生出山山頂遺跡	集落跡	縄文・弥生・平安
37	与繩日向遺跡	散布地	縄文
38	天正寺遺跡	集落跡	縄文・弥生・中世
39	日影松原遺跡	散布地	縄文
40	与繩城跡	城館跡	中世
41	深田遺跡	散布地	縄文・古墳
42	谷村城	城館跡	中世
43	谷村の烽火台	城館跡	中世
44	玉川遺跡	散布地	縄文・古墳
45	玉川金山遺跡	集落跡	縄文・奈良・中世
46	宮原遺跡	散布地	縄文

第3章 調査の方法と成果

第1節 発掘調査の方法

調査区域は、道路予定地内において十分な排土場所が確保できることから一度に全面調査を行うこととした。調査区内には世界測地系座標に基づく5m四方のグリッドを設定し、これまで行われたA区～C区の調査区域を踏襲した。調査区の南北方向に北からアラビア数字で1・2・3…、東西方向に東からアルファベットのA・B・C…の順で記号を付し、それぞれが交差する地点をA1グリッドと表す。よって隣接する美通遺跡C区とはグリッド番号が連続し、A区までグリッド名が重複することはない。D区はD～L、12～19グリッドに位置する。グリッド杭設置にあたってはこれまでと整合性をはかるため、平成23年3月11日以前となる平成22年度調査時における基準点を利用した。

表土剥ぎは、重機によって昨年度実施した試掘調査の結果をふまえて地表下約50cmにみられるスコリアを含む地層（第一面）直上までを行い、縄文時代の文化層がこの下層で確認されているため縄文時代（第二面）の文化層までを人力により慎重に掘削した。表土除去後には、人力による遺構確認を行い、発見された遺構については土層観察用のベルトを設けるか、半裁して確認しながら掘削した。各遺構については、平面図、断面図を作成し、出土遺物の位置を記録した。縄文時代包含層から多量の礫が出土したため、平面実測を行ったがさらに下層まで統いていくので、写真測量およびトータルステーションにてそれぞれ礫の出土位置の記録にとどめた。また出土する遺物については微細なものを除きトータルステーションにてグリッドあるいは遺構内での通し番号にて記録をとった。調査の進捗状況にあわせて発見された遺構や遺物については小型一眼レフカメラとデジタルカメラにて撮影を行った。

第2節 基本層序

試掘結果では地表下50～70cmで包含層に達する所見であったが、調査区西側は予想に反して浅く30cm程度で畠地表土及びその直下にある水田床土層に達し、これを除去するとすぐに包含層が現れた。旧地形は調査区東側の朝日川沿いに低くなっているが、調査区域は現況では畠地であるがもともと水田であったため、段丘中央部は耕地整理の際に一部削平されているものと思われる。D区における基本的な層序は以下のとおりである（第7図）。現地表はしまりのない淡褐色の耕作土（1層）であり、その下にはかたくしまった水田の床土（2層）がみとめられる。この2層を剥がすと下は赤色・黒色スコリアを多量に含む黒褐色土が20～30cm程堆積している。砂利状のスコリアにより上層の橙色スコリア（3層）と下層の黒色スコリア層を多量に含む層（4層）に分けることができるが、3層は部分的である。また4層は調査区の北西側にいくにつれ10cm程の厚さしかない。径2～3mm程の砂利状となるスコリアを含む4層は弥生時代以降で古代・中世の包含層となる。この下層はほとんどスコリアを含まない暗褐色土（5層）となり部分的に斑状に暗黄褐色土が混入する。この5層は縄文時代の包含層となり、この面で上層のスコリアを含む4層が掘り込まれているため遺構確認が可能となる。縄文時代はもっとも古いもので早期の押型土器が出土している。5層は漸位的に明るさを増して6層の暗黄褐色土の地山層となる。また5層の中にも6層に似た暗黄褐色土が斑状に混ざっていることから縄文時代の遺構確認は困難であった。さらにこの層中には流出した溶岩の表皮部分と思われる30～80cm程にもなる破片が散在して含まれている。人為的なものとも思われたがそれぞれの大きさや出土状況にまとまりもないため自然混入物と判断した。よって縄文時代の生活面となる5層下部から6層は、再堆積による地山層である可能性がある。試掘調査時の深掘りトレンチを再調査してさらに1m程下層を確認したが、調査区脇の朝日川崖線にみられる猿橋溶岩までにはB区のように達しなかった。

第3節 発見された遺構と遺物

調査区域の中央からほぼ東側にあたるところで縄文時代前期の諸礫a式土器が多量の礫とともにみつかってい

る。調査区全体で見ると該期の遺物が本調査区域のほぼ主体を占めている。上層の第1面は、近年の水田床土直下から確認でき、遺物量は少いものの古代・中世と弥生時代の遺物が出土した。下層の第2面となる縄文時代文化層とも重複するが、中世の遺構は溝状遺構から陶器片が出土したとの包含層より古銭が見つかった程度であり明確な文化層を形成していない。弥生時代は、土坑とピット群を検出した。土坑からは弥生時代中期初頭の壺、甕片が出土するものがあるが、他はほとんど遺物が出土せず覆土から弥生時代以降と判断した。第2面の縄文時代の包含層は斑状土層のため遺構などの掘り込みを明確にとらえることが困難であり、集石土坑の他に明確な遺構は検出できなかった。その中で、大量の礫が幅約6mで直径約25m程の環状を呈するように土器と共にみられた。この礫の出土状況には規則性は特にみられず、粗密をもちらん環状の範囲内から上下20~30cmの厚さをもって出土した。これに縄文時代前期後半の諸磯a式土器片が純粹に併せ、このほかに石鎚や石匙、石皿等の石器がみられた。ここから焼土を8箇所検出したが、周囲の遺物出土状況から住居跡に伴うものとの認識には至らなかった。よって縄文時代前期の諸磯a式期に形成された環状配石と判断した。この他に縄文時代早期の押型文土器、条痕文土器、前期諸磯c式土器、後期、晚期の土器等がわずかにみつかっている。

(1) 環状配石

調査区域のほぼ東側で検出した。幅約6m、直径約25mのドーナツ状(第53図)に拳大の礫を主体として、これにほぼ縄文時代前期の諸磯a式土器(第50~52図)に限られて出土する。環状配石と思われ、全体の約半分が調査区内にて検出された。北側半分は調査区外となる。礫は10,000点に及び10~20cm程の厚さでみられる。東側のE Fグリッドで厚く、西側は薄いが、いくつかのブロック状にまとまっている。これに伴う明確な遺構は明らかでないが、焼土跡がみつかっている。複数の住居跡がまとまっている可能性もあるが、住居跡として炉や柱穴は検出できず、焼土跡も配石のまとまりからはずれていることから環状配石とした。出土遺物は土器の他、石器類がある。石器は石鎚、石匙、石錐、削器、剥片石器、磨石、石皿等がある。これに伴って剥片類も多く、大部分が緑色凝灰岩であり、石核もみられる。黒曜石は数的には目立っているが、重量ではごく僅かである。石器や剥片類の分布は、環状配石の礫、土器と同様の出土状況を示しており、石器製作もおこなっていることがうかがえる。

• E13グリッド付近(第8図)

最も礫、土器が多く出土した。礫はおよそ拳大の大きさが主体で、30cm程のものが散在する。平均的に約20cmの厚さで礫がみられ、グリッド中央部ではさらに深くみられる。礫や土器などの出土状況はレンズ状堆積を示し、住居跡かとも思われたが、焼土もなくトレンチによって土層を確認したところ土層堆積は一様であり床面も検出できなかった。諸磯a式土器の新段階にみられる木葉文が目立つ(第24~28図)。E14グリッドからはやや礫、遺物出土が減ってくる。E14グリッドからは一つの狭状耳飾りが四つになって出土し、それぞれ補修孔がある。

• E15グリッド付近(第9図)

E15グリッド付近でも礫、遺物が多くみられ、10~20cm程の堆積となる。トレンチをいれて下層部を先行して確認してみたが、床面等の遺構検出には至らなかった。焼土跡を4箇所検出したが小規模であり周囲の遺物出土状況から住居にともなうものとは判断できなかった。土器は諸磯a式土器が主体であるが、肋骨文もレンズ状となるものや入組木葉文もあり新旧が混在している(第29~31図)。

• FG16.17グリッド付近(第10図)

拳大前後の大きさの礫が帶状にまとまって検出された。E15グリッドから離れるにつれて礫の出土は10cm程と薄くなっていく。トレンチをいれて下層部を先行して確認したが遺構は明らかでなかった。下層部での遺構は明確でないが、集石土坑が1基と11号土坑を検出した。配石とややはざれたところで4箇所の焼土を検出した。諸磯a式の新旧が混在しているが、新しいb1式がわずかにみられる(第32~35図)。

• H15グリッド付近(第11図)

礫がある程度まとめて検出されたが、堆積状況は薄い。拳大前後の礫とともに土器片がみられ、諸磯c式がやや目立つ。諸磯a式が新旧混在している(第35~36図)。

(2) 焼土 (第12図)

・E14焼土

礫の下に約90cm×60cmの長楕円形に焼土がみられた。焼土は厚く、掘り込みがみられる。使用に伴う土器はみられない。

・E15焼土

E15グリッドの配石が厚いところの下層からみつかった。浅いピットに切られている。焼土は小規模で50cm×30cm程の範囲がわずかに焼土化している。

・F14焼土

径80cm程の不整形に焼土を検出し、掘り込みがある。土器片が上部に散在しているが、配石に伴うもので特異性はない。

・F15焼土

40~50cm程の不整形に焼土を検出したが、掘り込みはみられない。土器片(E15-5)がみられるが、伴うものではない。

・F16焼土 1

90×50cm程の長楕円形に焼土がみられ、ピットに落ち込んでいる。

・F16焼土 2

50×40cm程に焼土化しており、掘り込みはみられない。

・FG16焼土

並列して2箇所の焼土がみられた。100cm程の不整形の焼土であり、掘り込みがみられる。環状配石からややはずれた内側にある。

(3) G15集石 (第12図)

環状配石の内側で中心部分に近い位置にある。20~30cm程の円礫がまとまっており、この下に土器がみられた。土器は口縁部、胴部、底部の別の3個体分で、礫の一つは半割れの平石皿である(第49図26)。掘り込みは明確ではなかったが、土坑であった可能性がある。土器は縄文のみ施文された諸磯a式である(第23図)。

(4) 集石土坑 (第12図)

F16グリッドに位置し、環状配石の外縁部付近となる。径150cm程で深さ40cmの擂鉢状の土坑に拳大礫がぎっしり詰められている。若干の炭化材と土器片が出土した(第22図)。時期は配石と同じく諸磯a式期である。

(5) 土坑 (第13.14図)

・1号土坑

径150cm程の円形で深さ20cmの平底となる。弥生中期初頭土器の壺、甕が破片ではあるが比較的まとまって覆土中より出土している(第40図)。覆土にはスコリアが多量に含まれる。

・2号土坑

径130cm程の円形で深さ25cmの平底となる。弥生中期初頭土器の壺、甕が散在して、覆土中より出土した(第40図)。石鎌(第42図2)、磨石(第49図27.28)が出土している。覆土にはスコリアが多量に含まれる。

・3号土坑

径100cm程の円形で平底となる。覆土に多量のスコリアを含む。遺物はみられなかつたが、形状から弥生時代に属するものと思われる。

・4号土坑

径100cm程の円形で深さ60cmの平底となる。覆土にはスコリアを多量に含み、上部に礫がみられた。遺物は縄文土器が出土しているが、覆土から弥生時代以降に属するものと思われる。

・5号土坑

100×60cm、深さ30cm程の楕円形土坑である。覆土にはスコリアを多量に含む。遺物は縄文土器が混在しているが、時期は明らかでない。

・6号土坑

径90cm程の円形で深さ約40cmの平底である。覆土にスコリアを多量に含む。縄文土器が混在しているが、時期は明らかでない。

・7号土坑

130×70cmの方形を呈し、深さ20cm程となる。時期不明。

・8号土坑

径100cm程の円形で深さ20cmの平底となる。覆土にスコリアを多量に含む。時期不明。

・9号土坑

幅約100cm、長さ約100cmであるが調査区外へ延びる。覆土にスコリアを多量に含み、礫が多く出土した。時期不明。

・10号土坑

110×120cm程の不整形で深さ20cmとなる。礫が多く出土し、覆土にスコリアを多く含まない。縄文土器が出土しており、配石に伴うもの可能性がある。

・11号土坑

G16.17グリッドに位置し、200×300cm程の不整楕円形を呈する。環状配石の中にあって、覆土底面から礫が多量に出土することから、配石の一部である可能性がある。遺物は覆土中から縄文土器が散在している。諸磯a式期。

・12号土坑

調査区南東部の朝日川崖線に近い箇所の落ち込みにかかるように検出された。130×100cm程の楕円形を呈するものと思われる。礫や縄文土器が覆土中から出土しているが、時期は明らかでない。

(6) 溝状遺構（第15図）

・1号溝

幅約70cm程で調査区外に延びているが、長さ4m、深さ30cm程の平底となる。東西方向からややすれるが、2号溝、3号溝と直行する方向にある。覆土は南側から流れ込んだような自然堆積を示す。またスコリアを多く含むことから中世以降と思われる。覆土中から縄文土器が出土している。

・2号溝

幅約70cm程で調査区外に延びているが、長さ2.5m、深さ25cm程の平底となる。南北方向からややすれるが、1号溝と直行する方向にある。覆土にスコリアを多量に含む。時期は明らかでないが中世以降と思われる。

・3号溝

H16.17グリッドの2号溝の延長線上にあるが、ややすれている。幅45~50cm、長さ3.5m、深さ10cmの平底を呈する。遺物はみられず、2号溝と同じ性格のものと思われる。

・4号溝

幅65cm、長さ180cm、深さ20cm程の平底となる。2、3号溝と主軸方向が同じである。覆土にスコリアを多量に含む。大きさから土坑に類する。時期は明らかでないが中世以降と思われる。

・5号溝

幅50cm、長さ2.7m、深さ15cmを測る。ほぼ東西方向に主軸を持ち、1号溝と同じ方向である。覆土はスコリアを多量に含む。拳大の礫が多く出土し、常滑大甌の小片が出土している（第41図中世4）。時期は陶器片から中世と思われる。

・6号溝

5号溝に主軸を同じくして並列している。幅60cm、長さ220cm、深さ40cmを測る。覆土にはスコリアを多量に含む。遺物は出土していないが、中世以降と思われる。

・7号溝

3号溝の主軸の延長線上にある。幅70cm、長さ120cmの不整長方形を呈する。深さは5cm程度である。覆土に

スコリアを多量に含む。遺物は出土しなかったが、中世以降と思われる。

(7) ピット群（第16～20図）

調査区域の主に西側から多くみつかっている。縄文時代の包含層中にスコリアを多量に含む黒褐色土にて掘り込まれており識別は容易である。特に規則性も見られず、散在している。

・EFグリッド付近

配石遺構のE15.16グリッドにて径20～60cm程度のピットが6基検出された。E15ピット1やE16ピット1など、スコリアを多量に含むものは縄文時代ではなく後世のものである。F14グリッドでも4基のピットがまとまっている。

・GH15グリッド付近

配石遺構の内側に位置するが、縄文時代のものではなく、ほとんどが覆土中にスコリアを多量に含むものである。径30～60cm程度の円形で深さ10cm程度である。H17.18グリッド付近の7号溝、7号土坑付近にも散在している。

・JK16グリッド付近

最も多くのピットが集まって検出されたが、有意性は認められない。径30cm前後のものが多く、径60cm程度のものまである。深さは10～20cm程度である。ほとんどが覆土にスコリアを含む。ピットからの遺物出土ではなく、周囲から縄文土器片がわずかに出土しているが、ピットは縄文時代ではなく後世のものである。

(8) 遺構外出土遺物

・縄文時代早期（第21.22図）

調査区域全体から散在して出土する。纖維を含む条痕文系土器が多くめだっている。縦位山形文の押型文土器がわずかに出土している。本遺跡の岩盤となる猿橋溶岩は約8,500年前の年代とされていることからそれ以降のものとなる。鶴ヶ島台式土器や早期末の貝殻腹縫文が特徴となる打越式土器がわずかにみられる。

・前期（第37.38図）

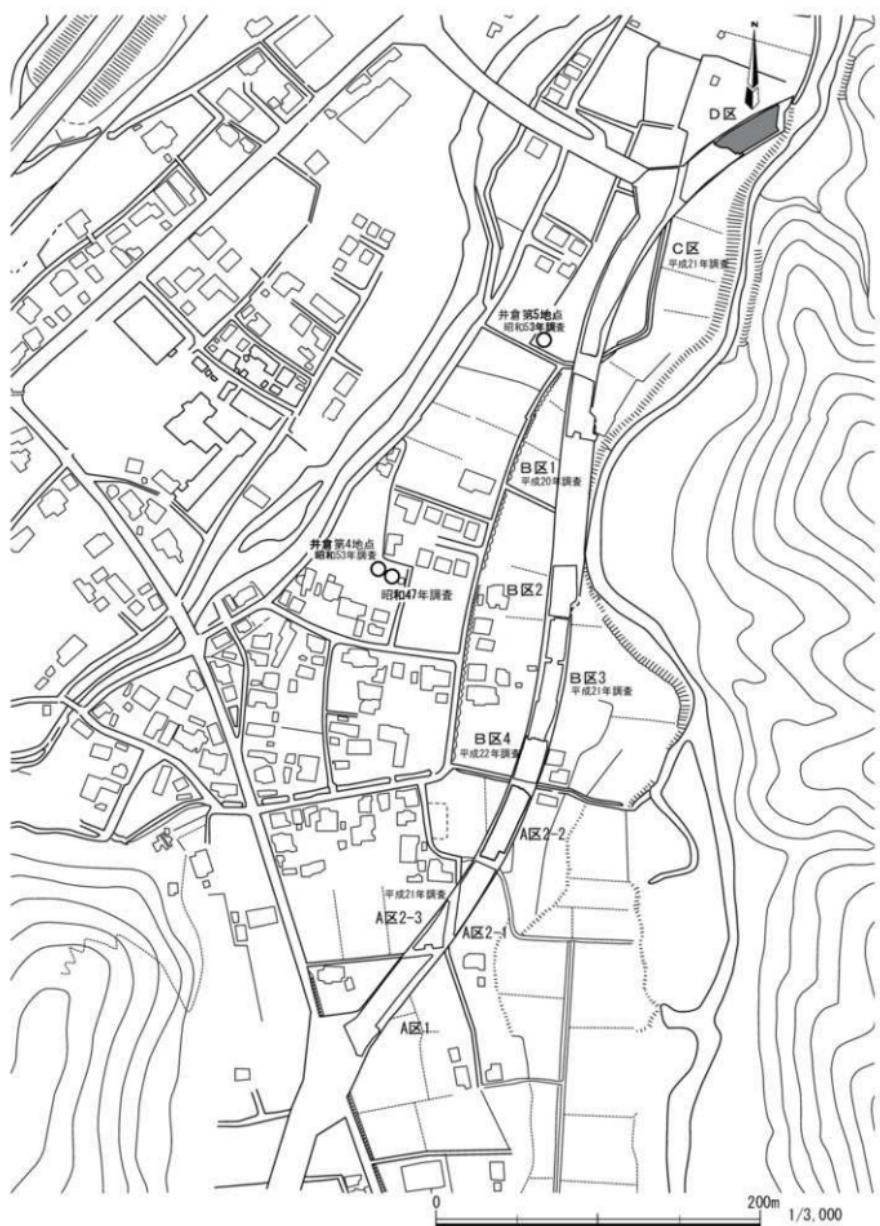
諸磯a式土器は、環状配石に伴って出土しているほか、これ以外からは調査区全体に散在している。これ以後は、諸磯c式土器が調査区北側にやや偏って集中して出土する傾向にある。ボタン状貼付文が二個一対で付き、縦位結節文も沈線で表現され、諸磯c式末期のものである。すべて同時期のものである。前期末の土器はFG15.16付近に集中する。集合沈線文系土器はほとんど同一個体である。結節浮線文や押圧隆帶文が付されるものもあり、前期末でも後半段階の一時期に集約される。

・中期・後期・晚期（第38.39図）

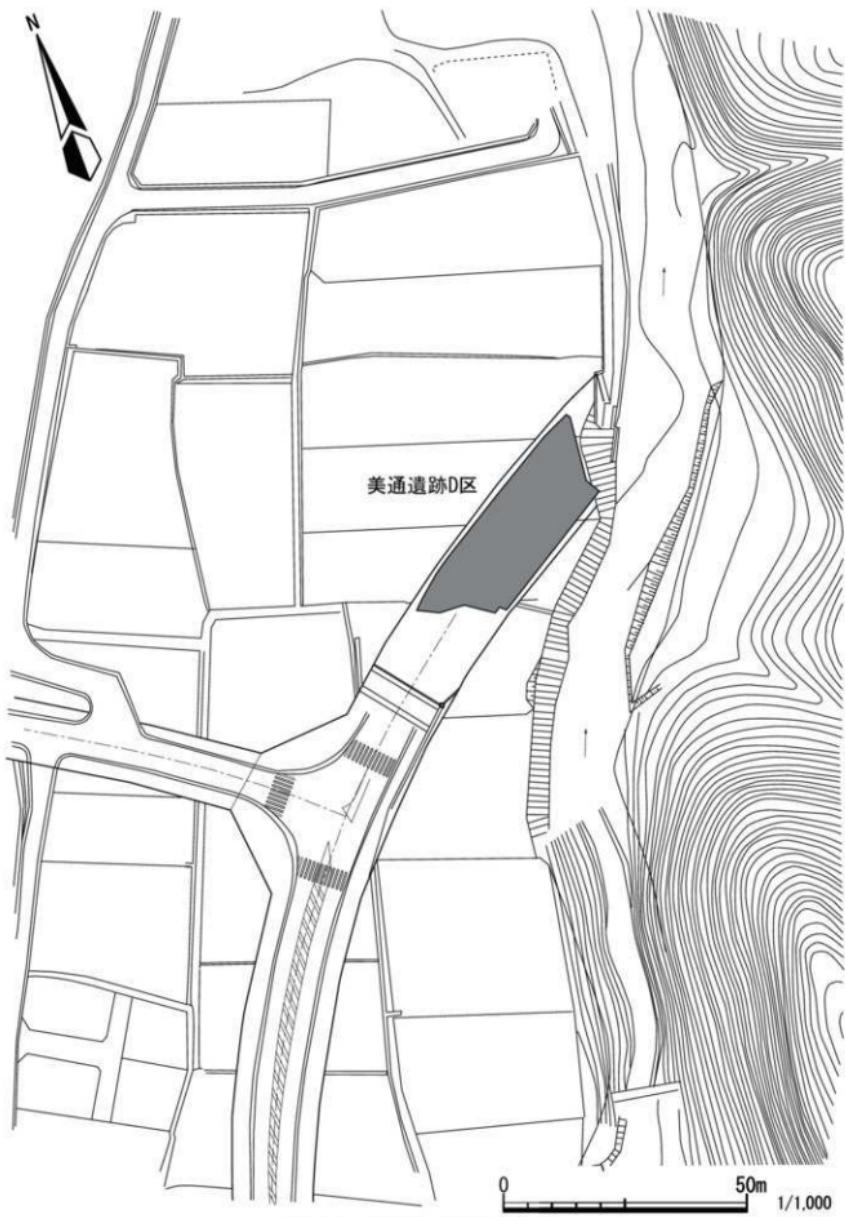
D区において中期の土器は中期後半の曾利V式土器片二点のみである。後期の土器は、調査区全体に散在している。称名寺式土器は後半期のものに限られる。堀之内式土器は前半期のものが少ないもの目立っている。加曾利B1式がわずかに出土している。晚期では氷式土器が数点みられる。

・その他（第41図）

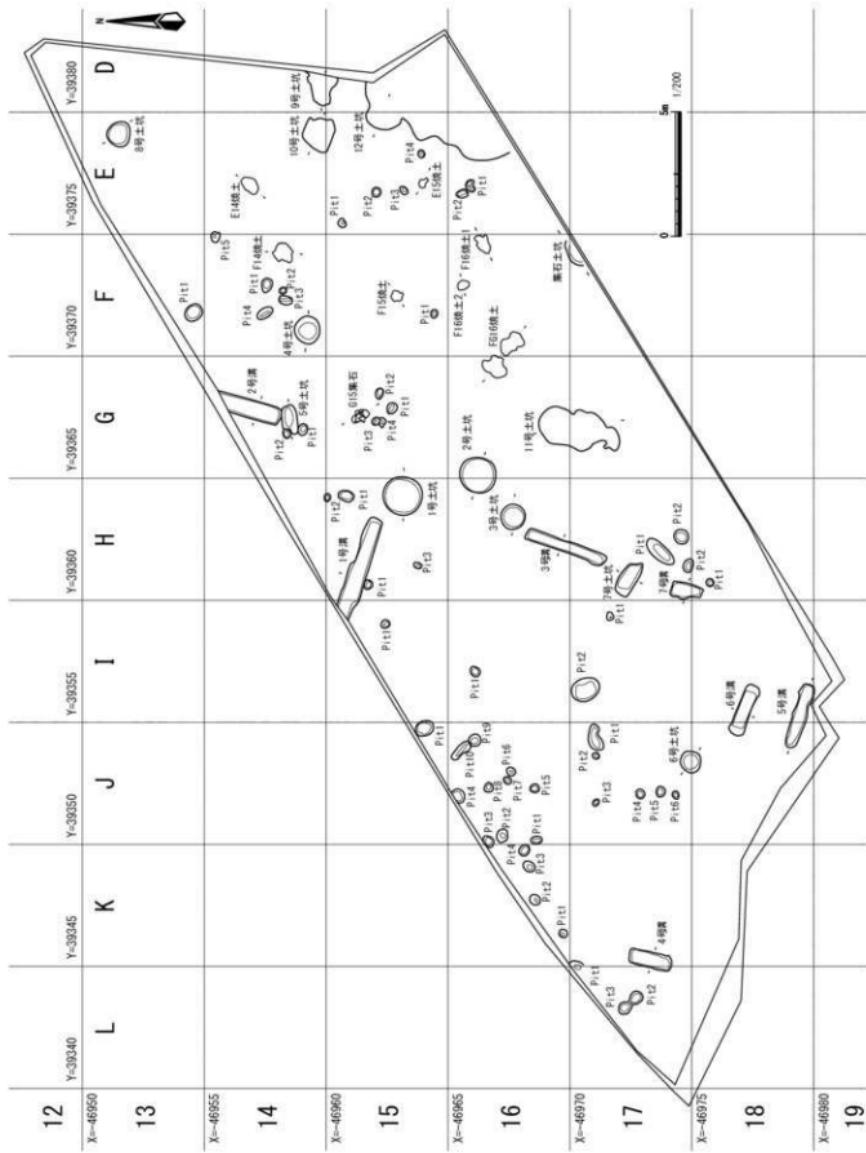
弥生土器は、土坑と同じ中期初頭のものが調査区東側に偏って出土しているがいずれも小片である。美通遺跡全体をとおして広く分布している。古墳時代須恵器片が1点みられた他、中世では内耳鍋片、陶磁器類、古錢、鉄器がわずかに出土している。明確な文化層は形成していないか削平されたものと思われる。



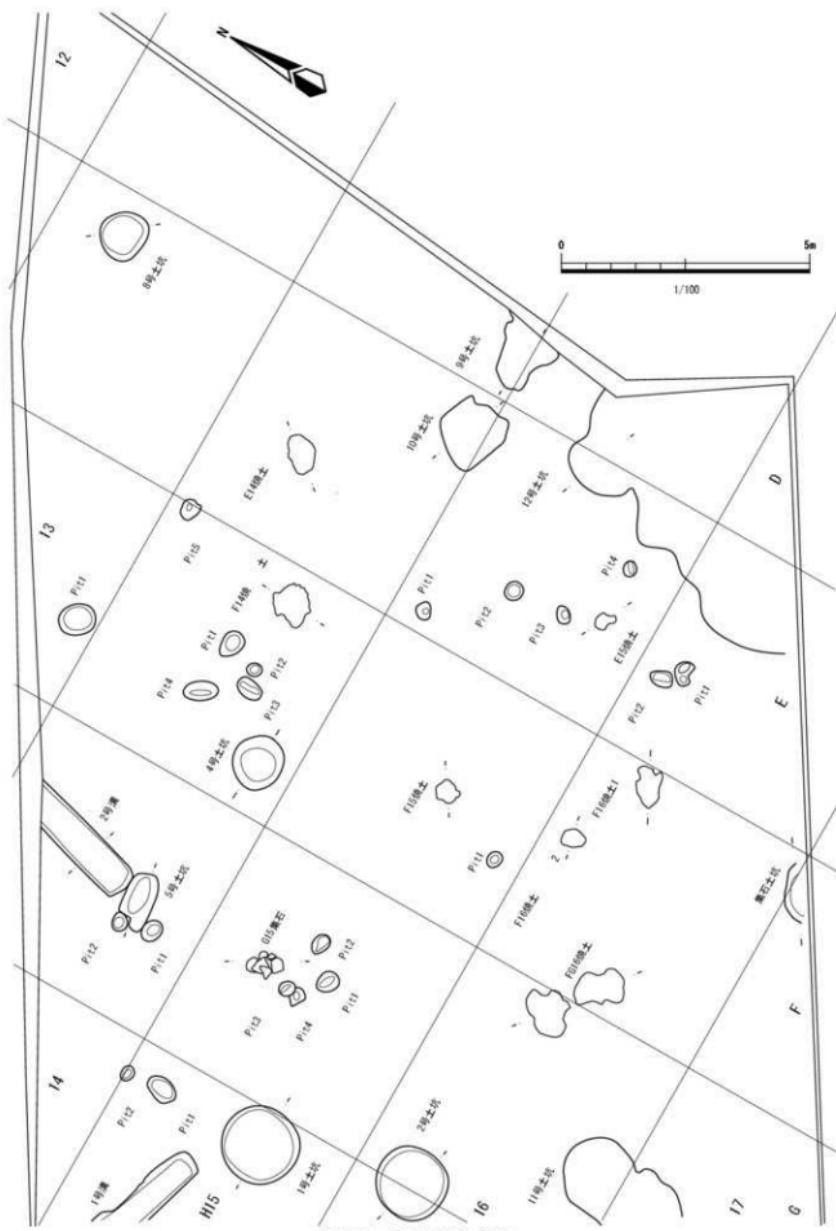
第2図 美通遺跡調査区位置図



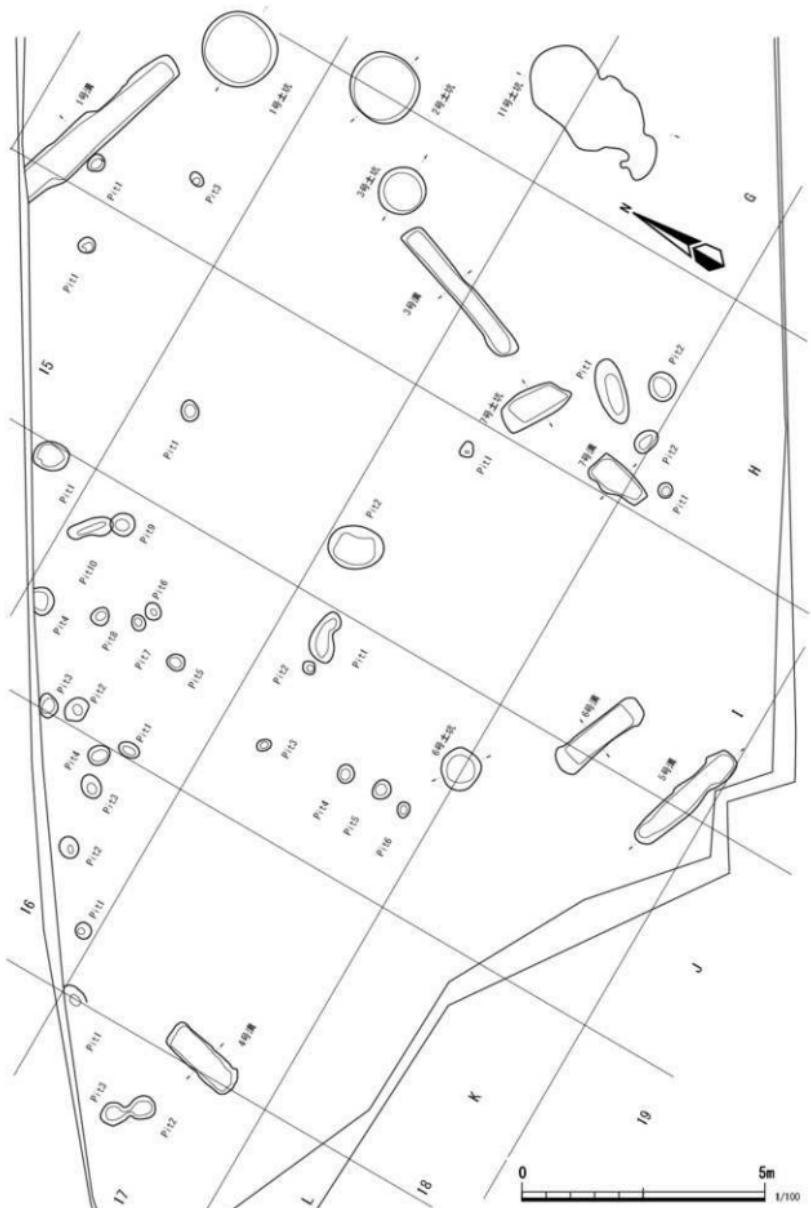
第3図 美通遺跡D区周辺地形図



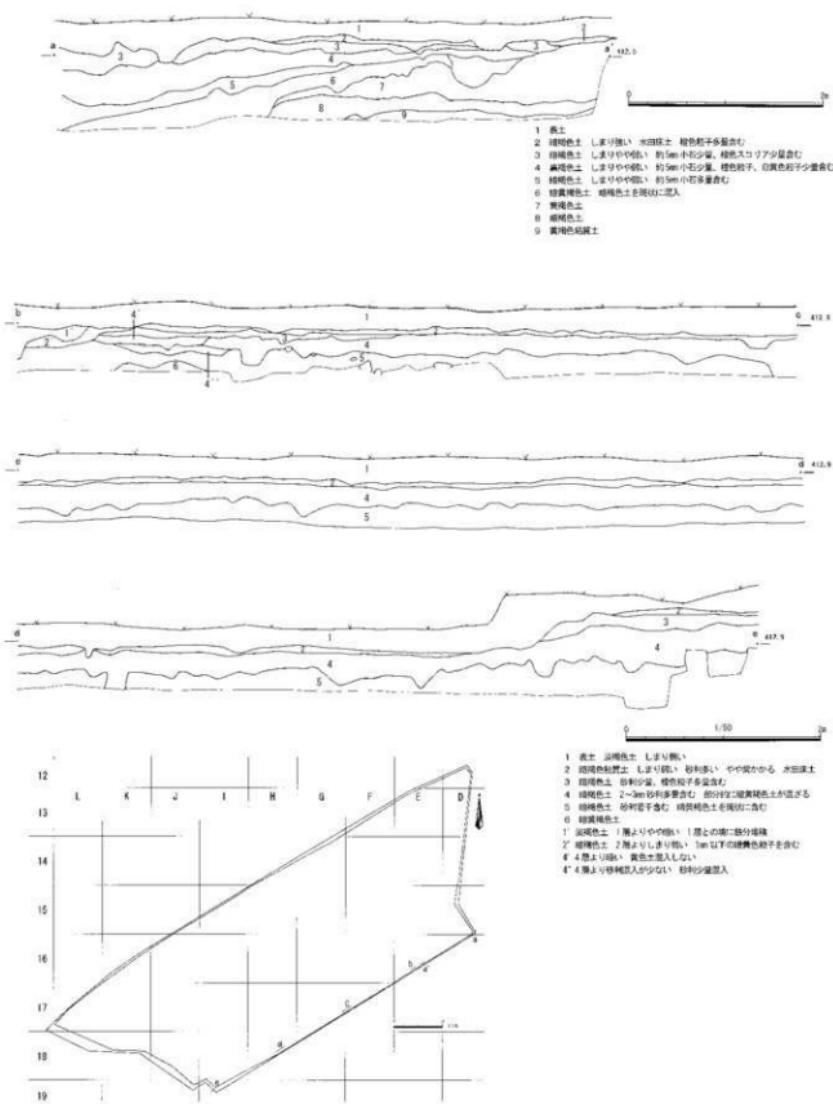
第4図 美通遺跡D区グリッド配置全体図



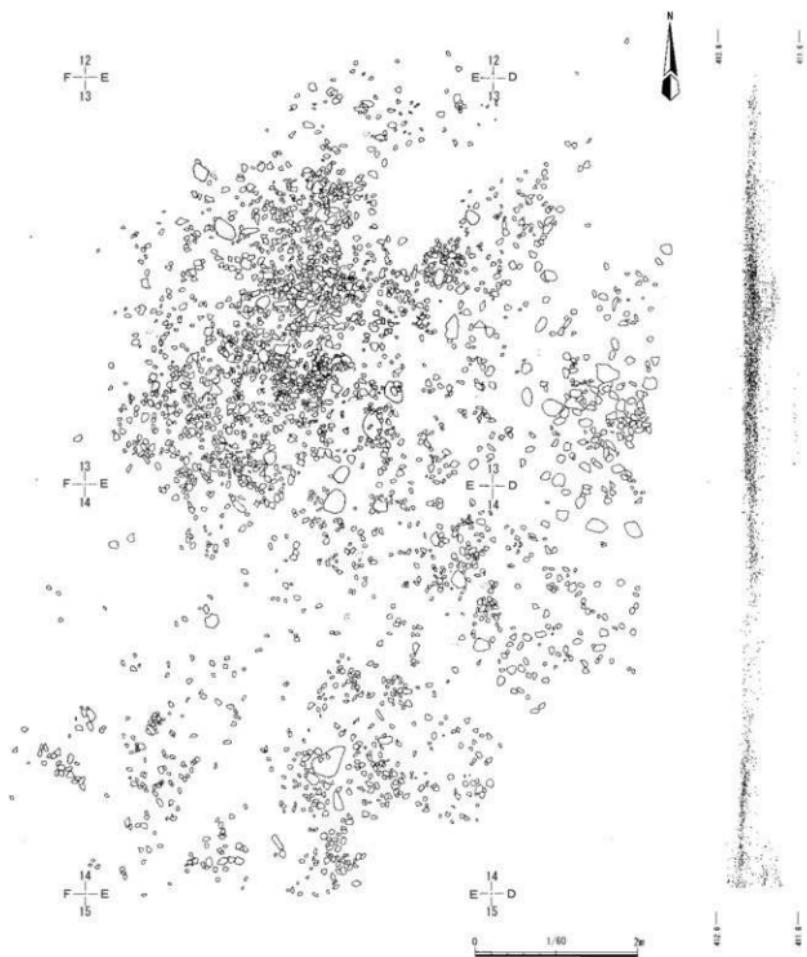
第5図 D区全体図(1)



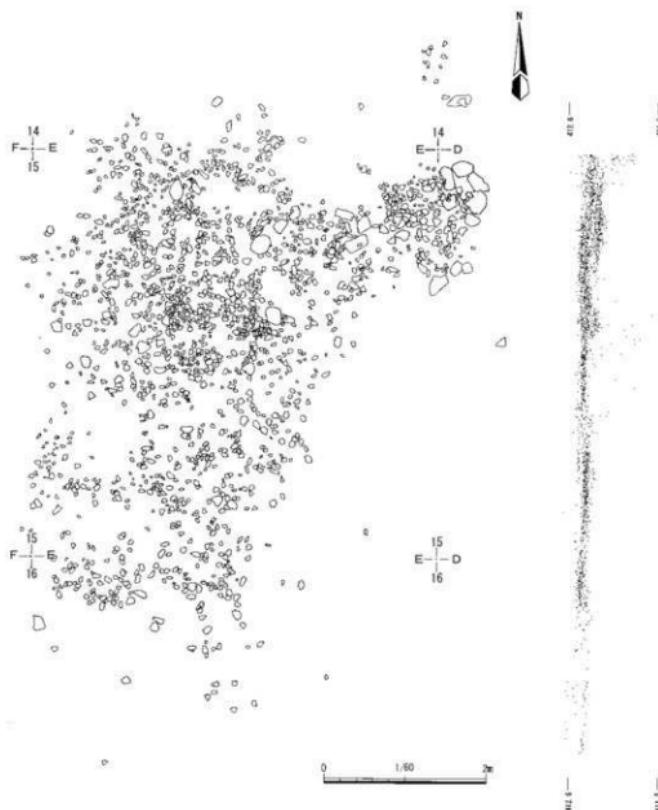
第6図 D区全体図(2)



第7図 D区基本土層



第8図 配石 DE13.14



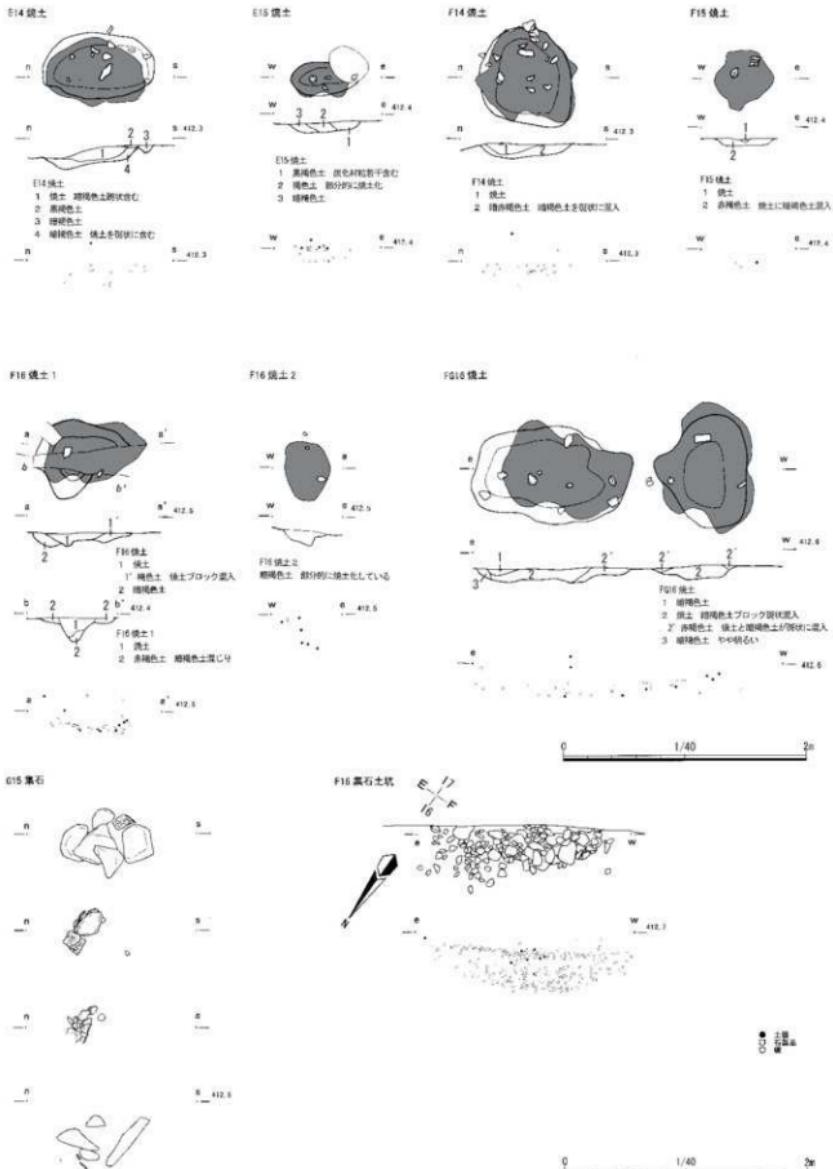
第9図 配石 E15



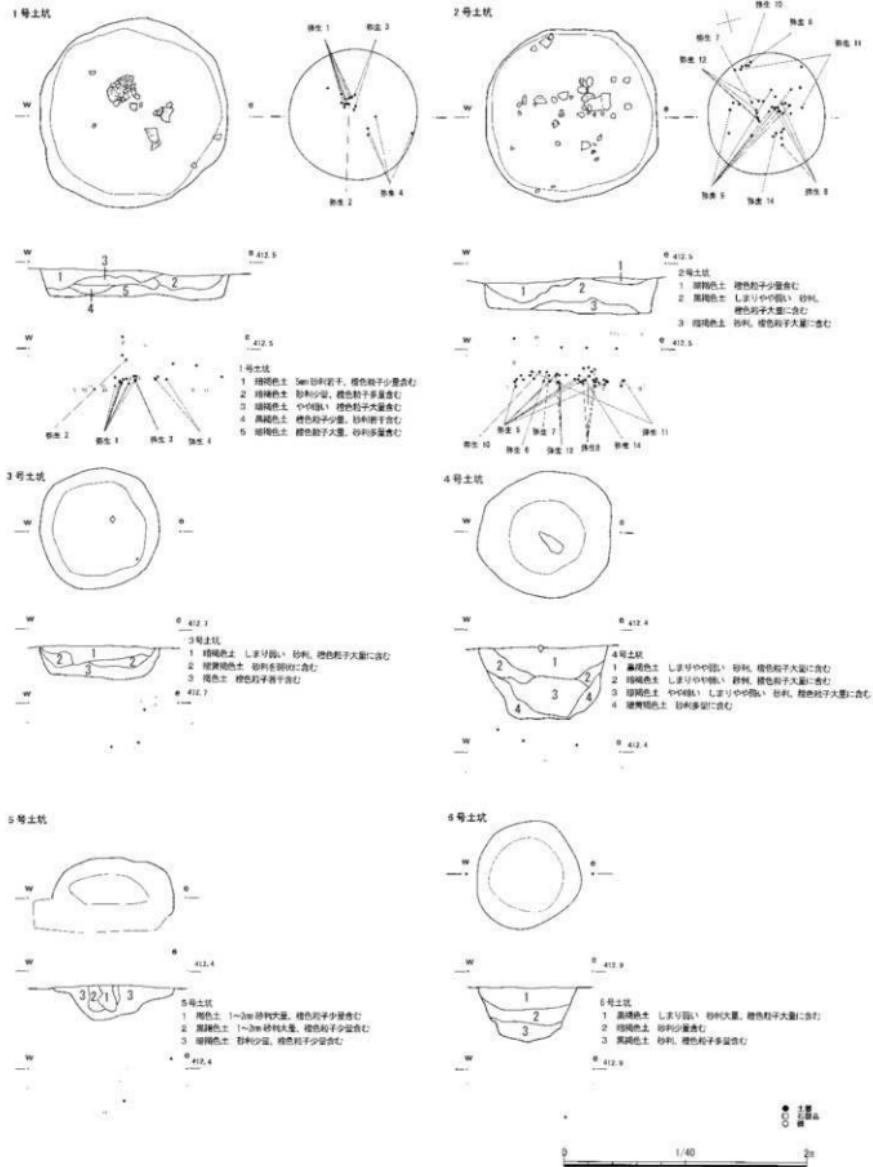
第10図 配石 FG16.17



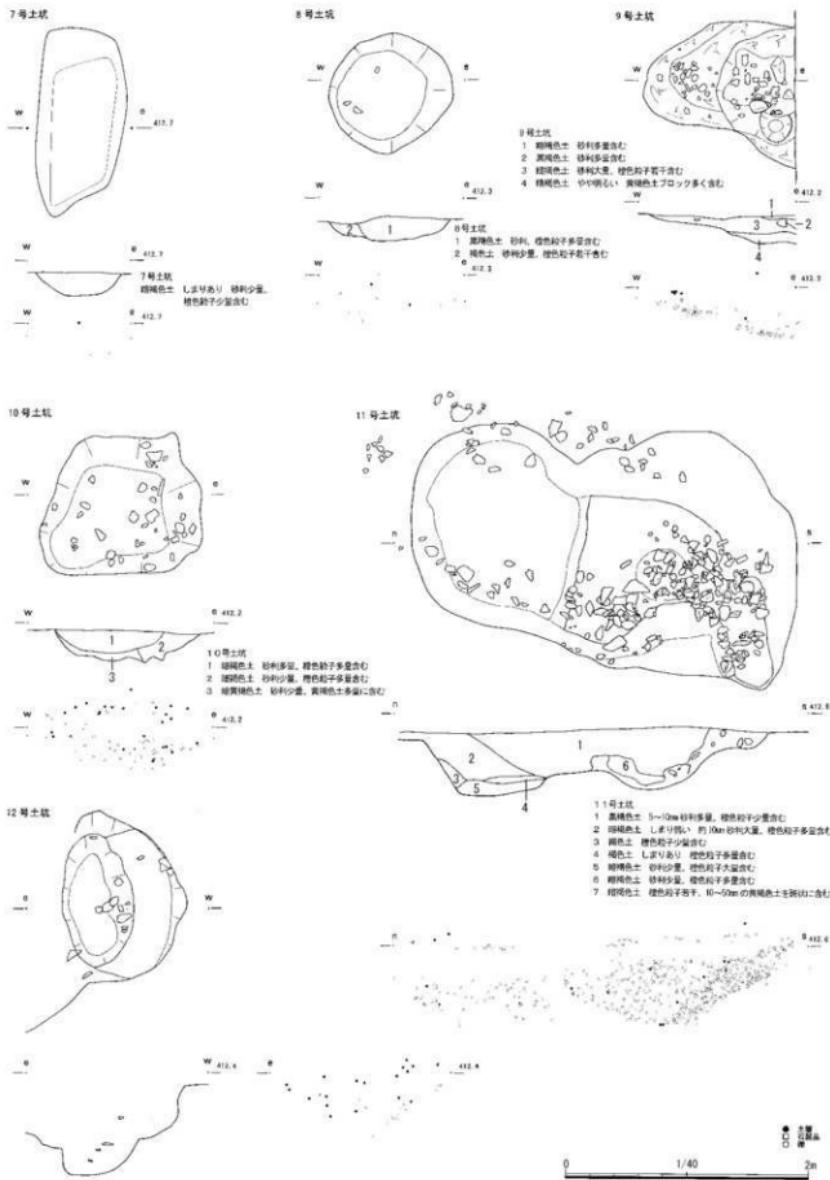
第11図 配石 GHI15.16



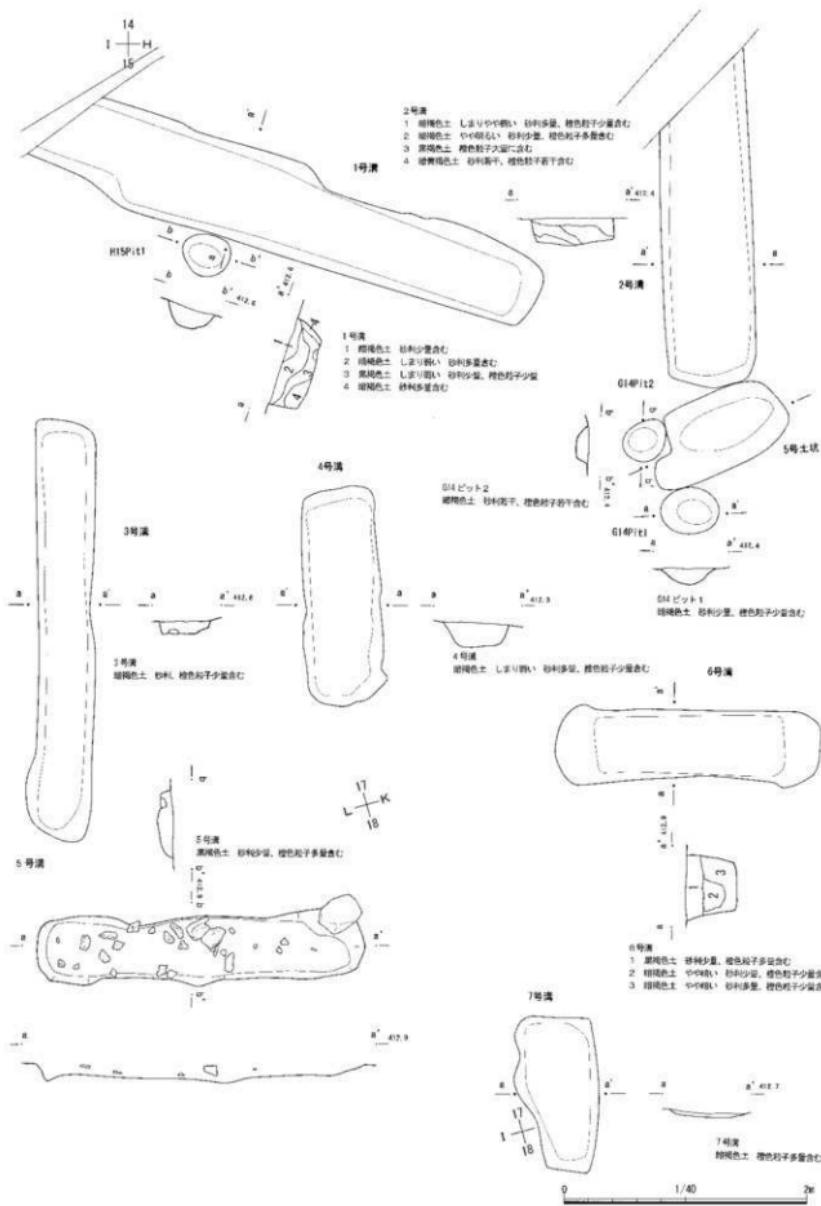
第12図 焼土 集石 集石土坑



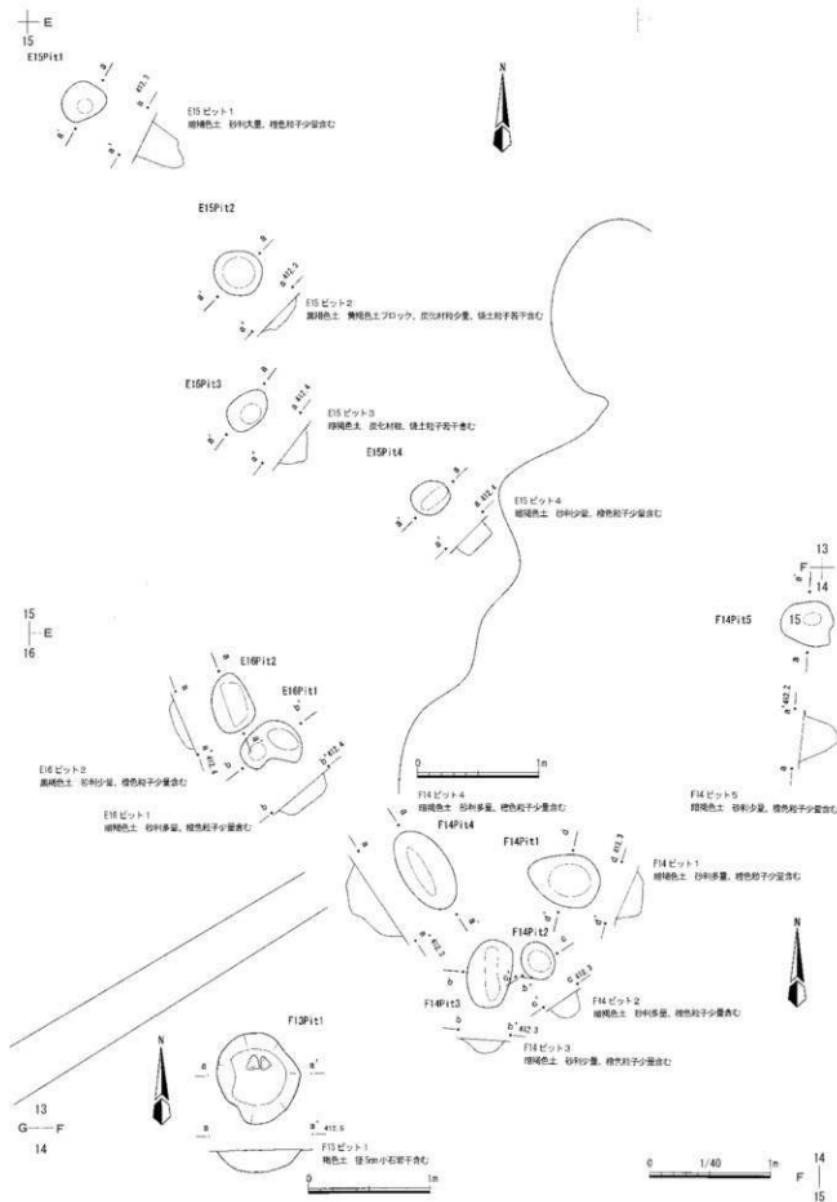
第13図 土坑(1)



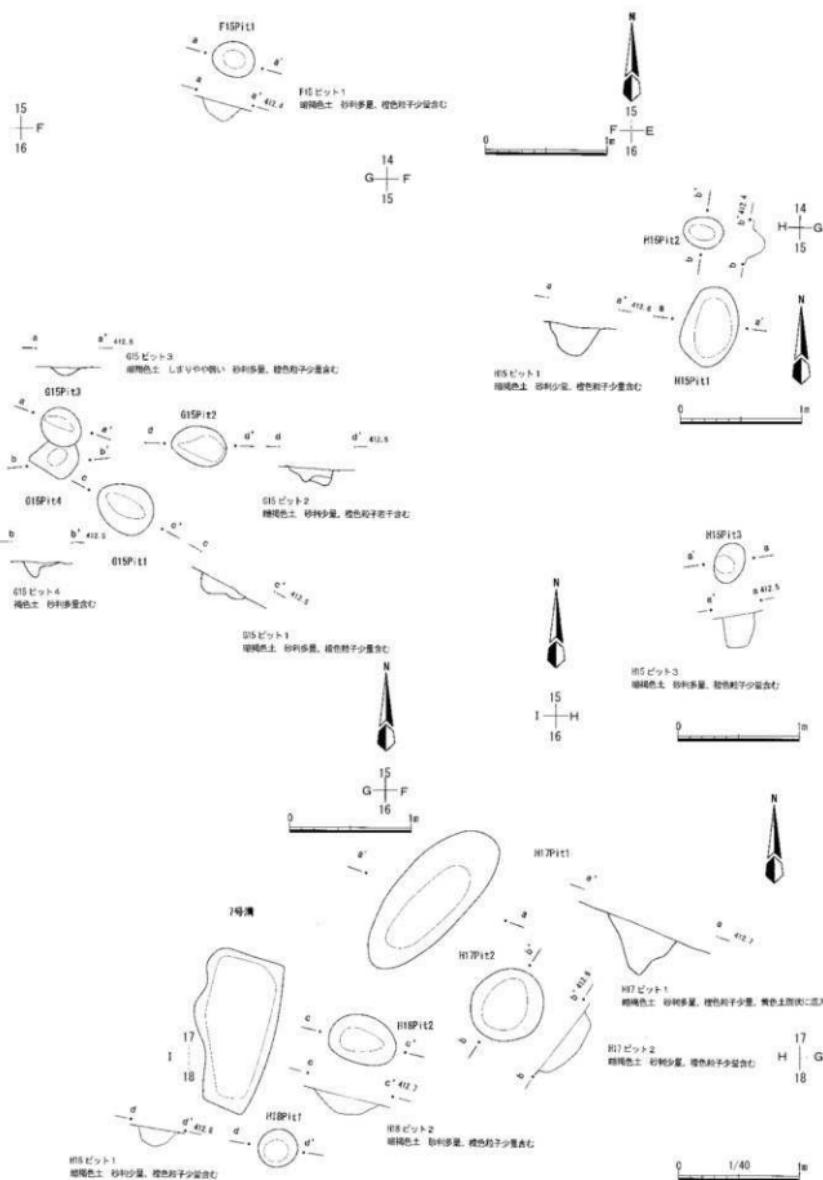
第14図 土坑(2)



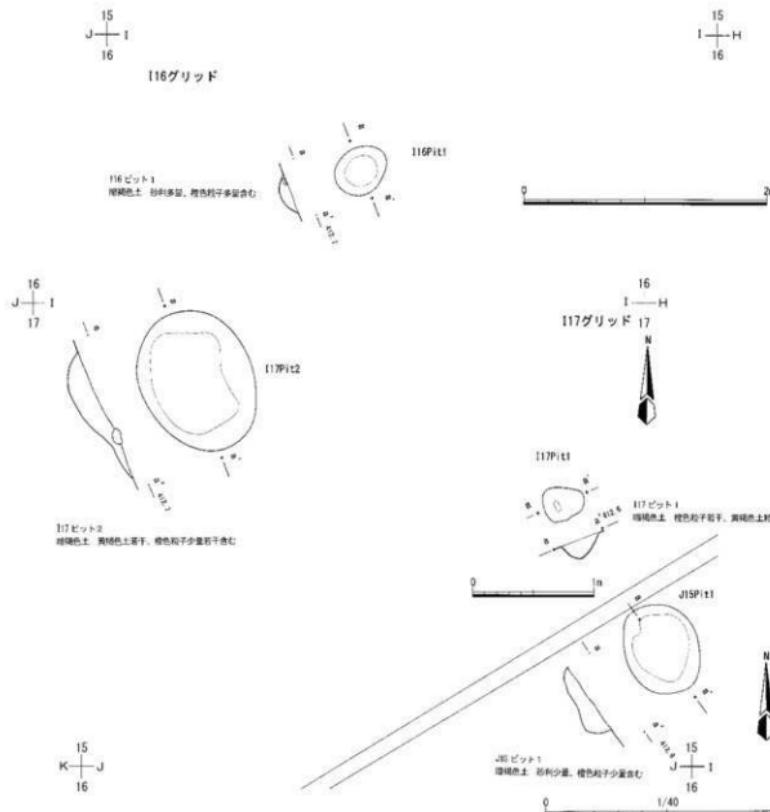
第15図 溝



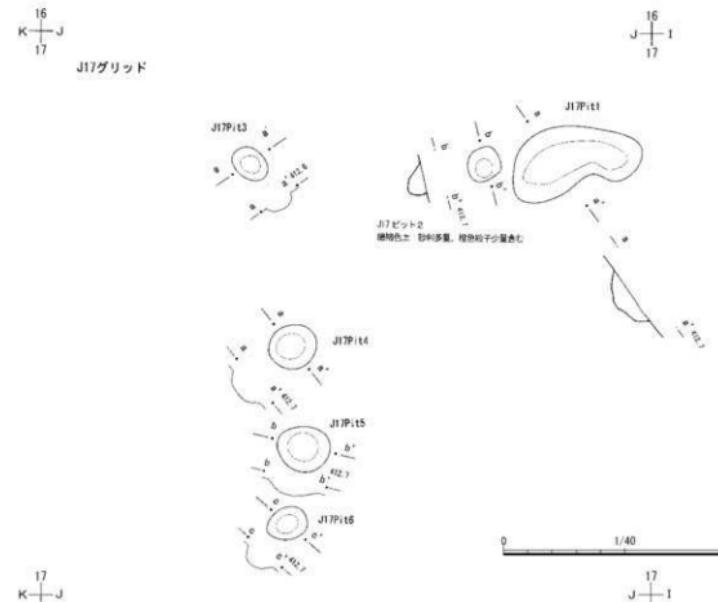
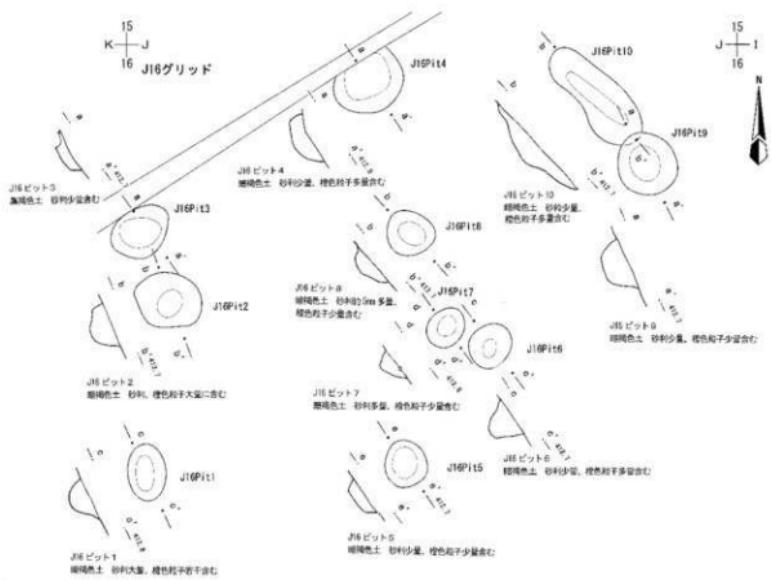
第16図 ピット群(1)



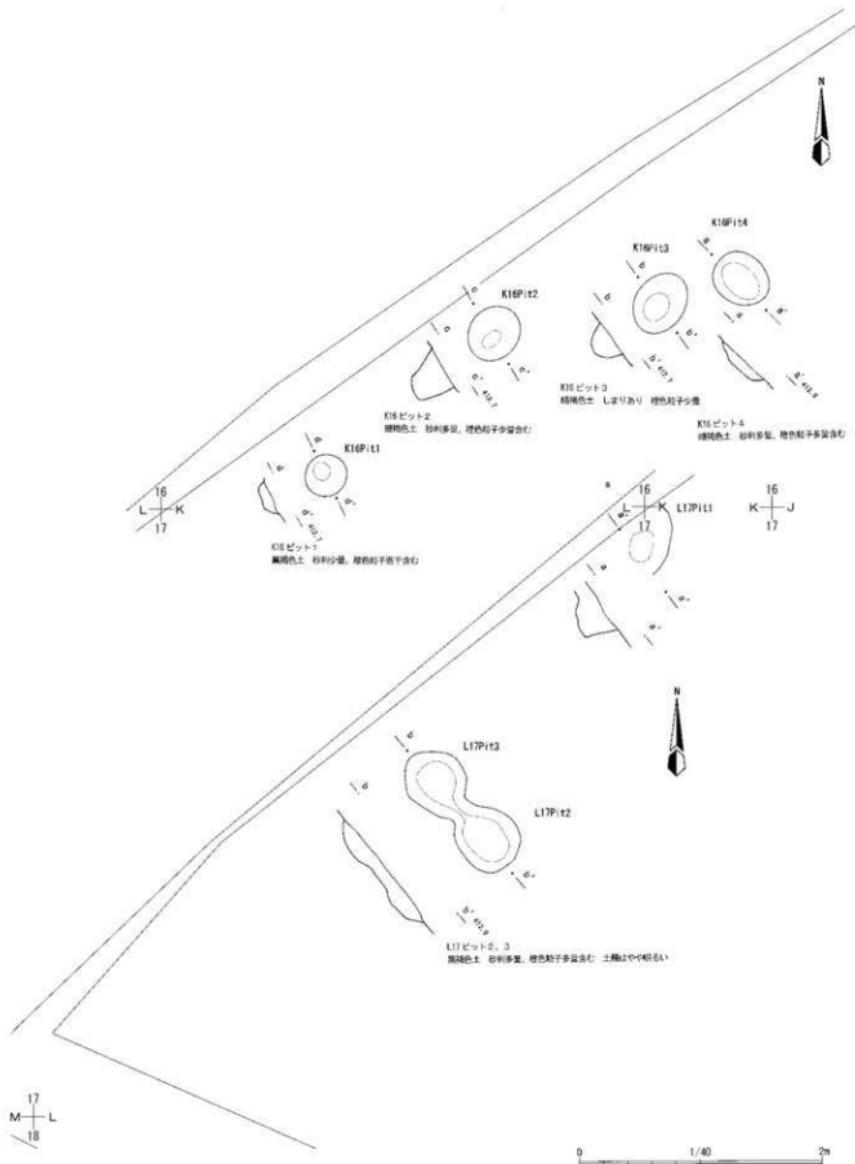
第17図 ピット群（2）



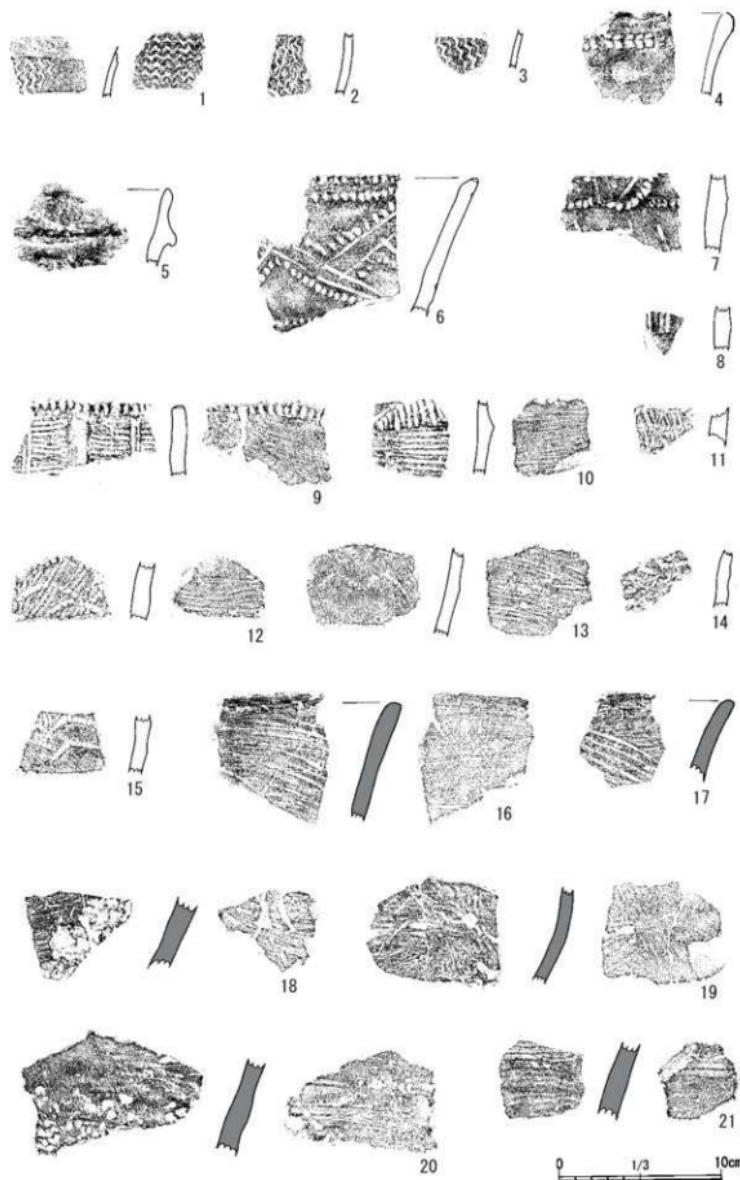
第18図 ピット群(3)



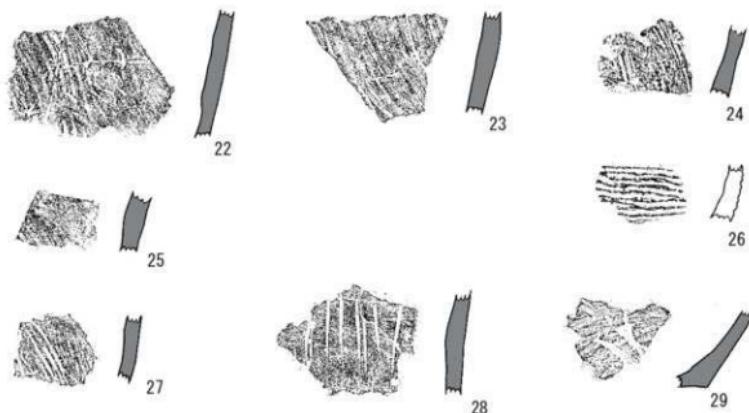
第19図 ピット群(4)



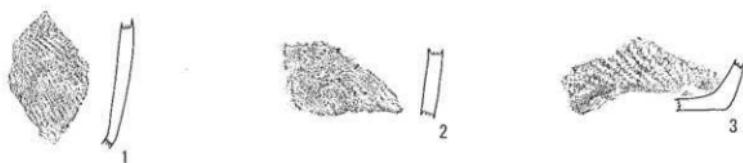
第20図 ピット群 (5)



第21図 出土遺物 縄文時代早期（1）



前期 諸磯 a
集石土坑

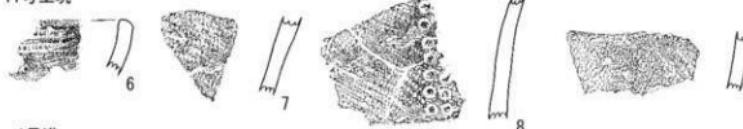


9号土坑

10号土坑

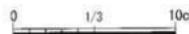


11号土坑



1号溝

6号溝

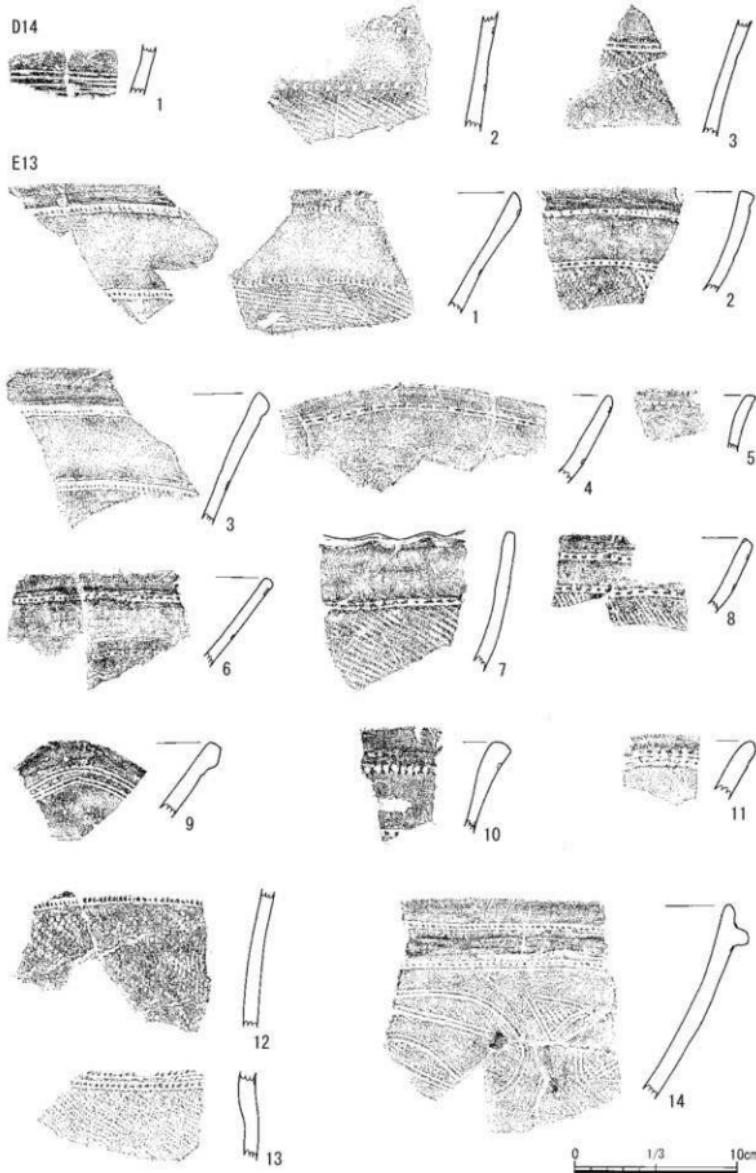


第22図 出土遺物 繩文時代早期(2) 前期(1)

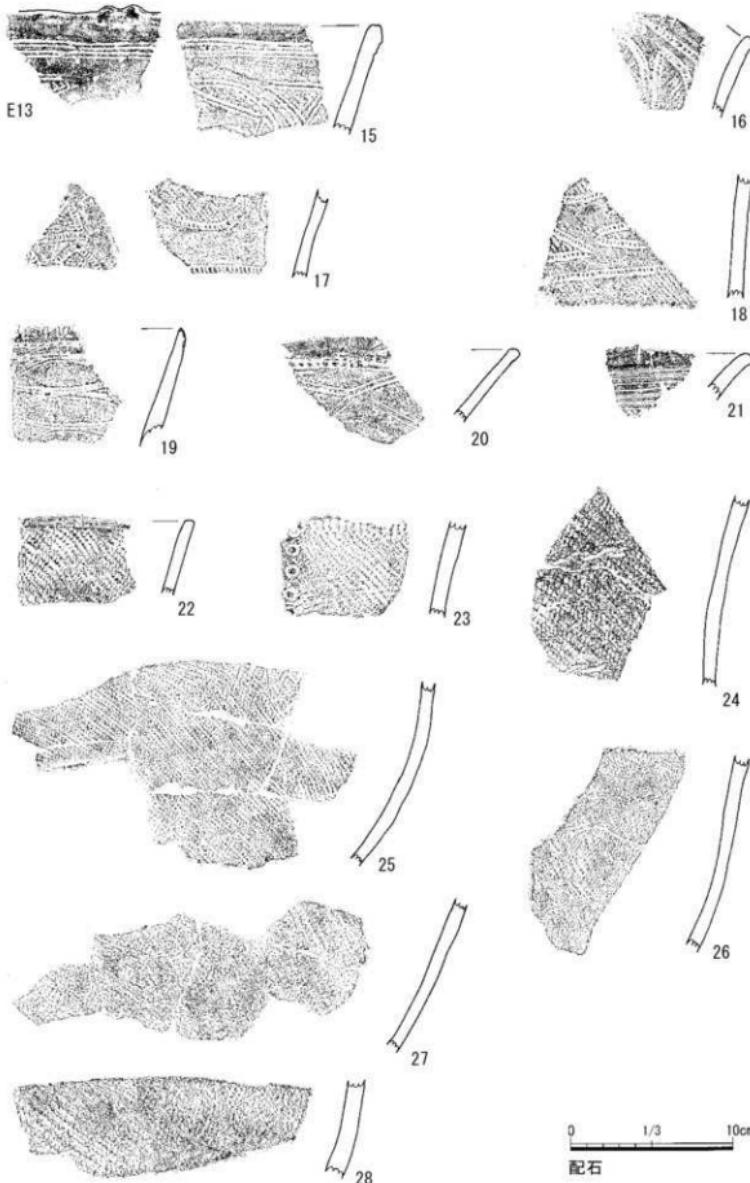
G15集石



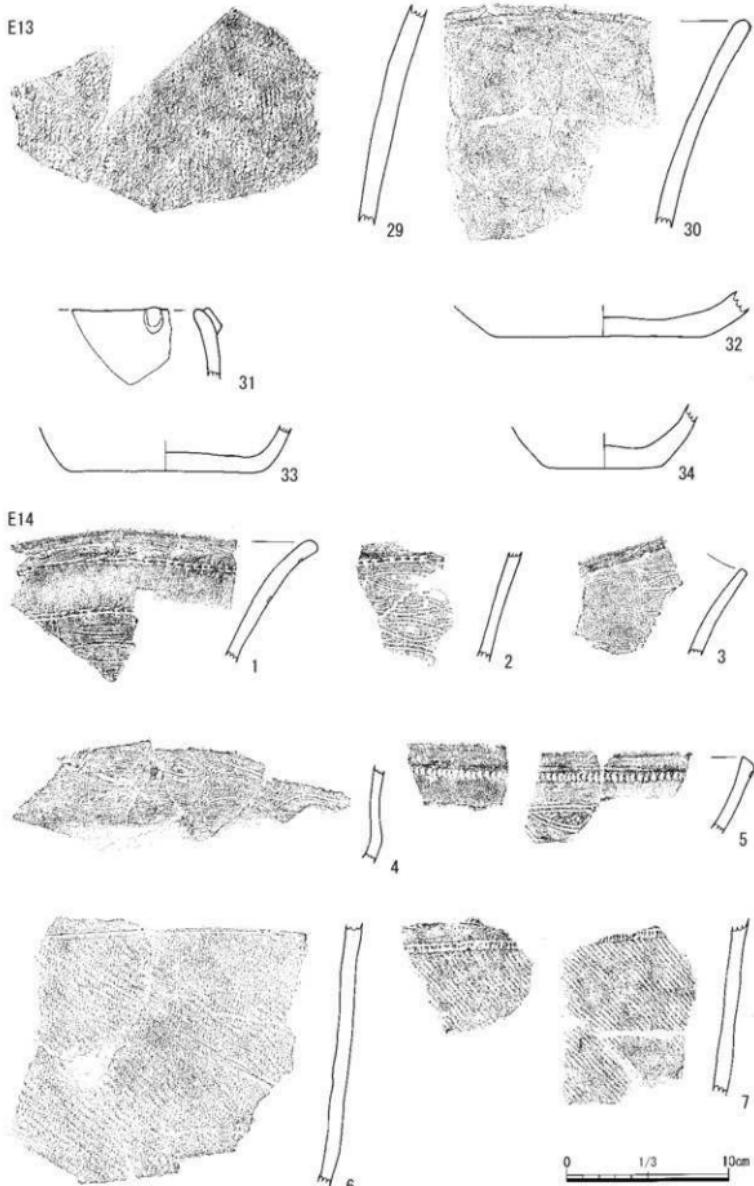
第23図 出土遺物 繩文時代前期（2）G15集石



第24図 出土遺物 繩文時代前期（3）配石D14.E13

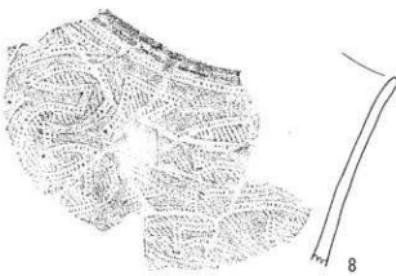


第25図 出土遺物 繩文時代前期(4) 配石E13

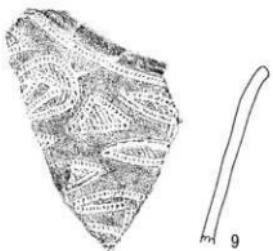


第26図 出土遺物 繩文時代前期（5）配石E13.14

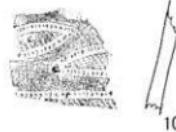
E14



8



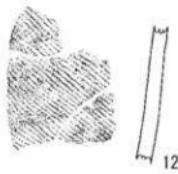
9



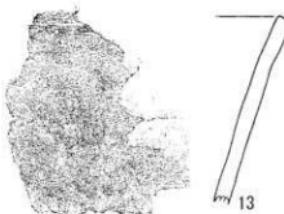
10



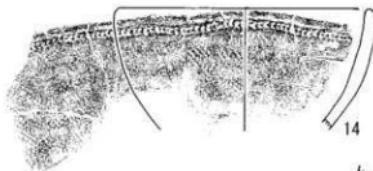
11



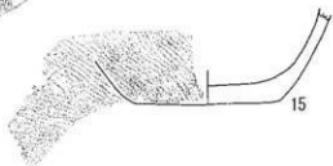
12



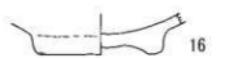
13



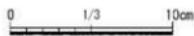
14



15



16

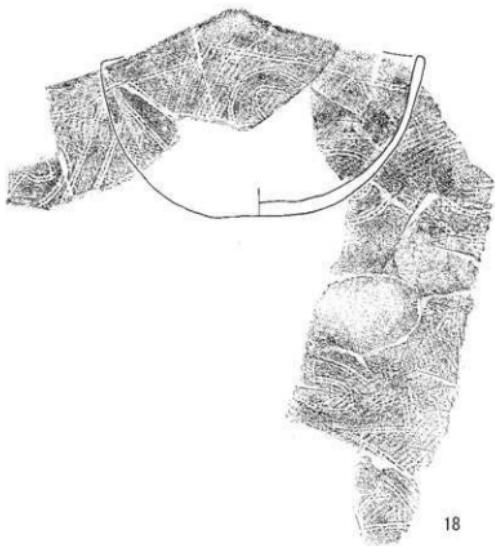


第27図 出土遺物 繩文時代前期（6）配石E14

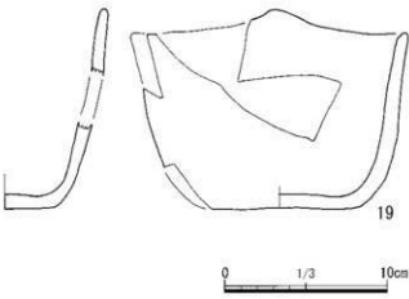
E14



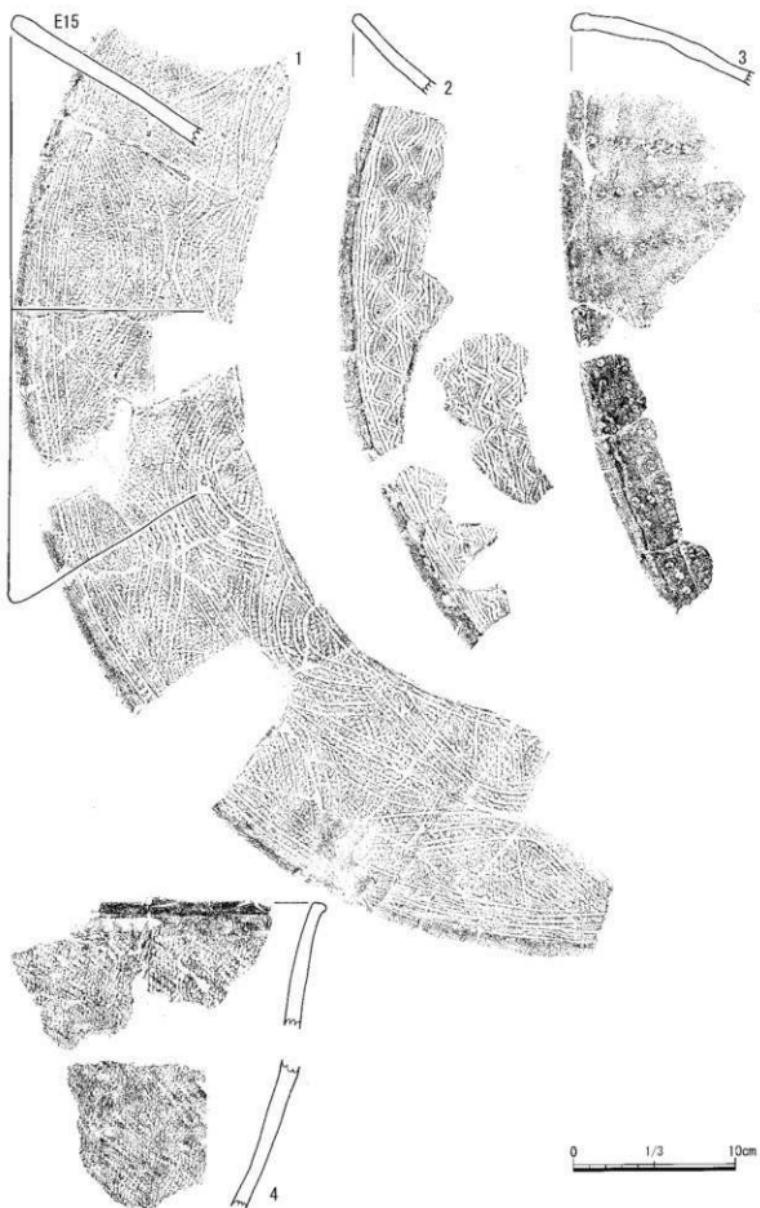
17



18

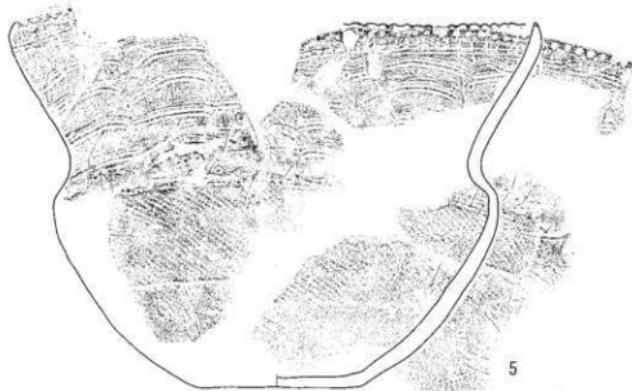


第28図 出土遺物 繩文時代前期（7）配石E14

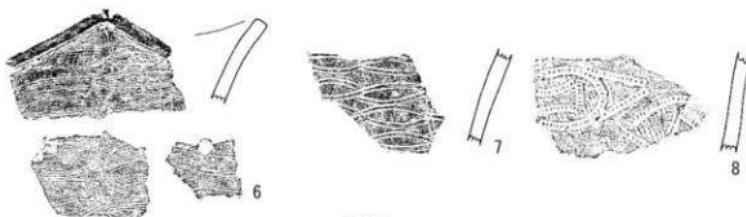


第29図 出土遺物 繩文時代前期（8）配石E15

E15



5

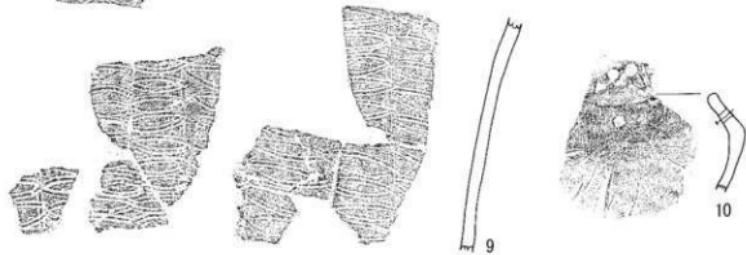


6



7

8



9

10



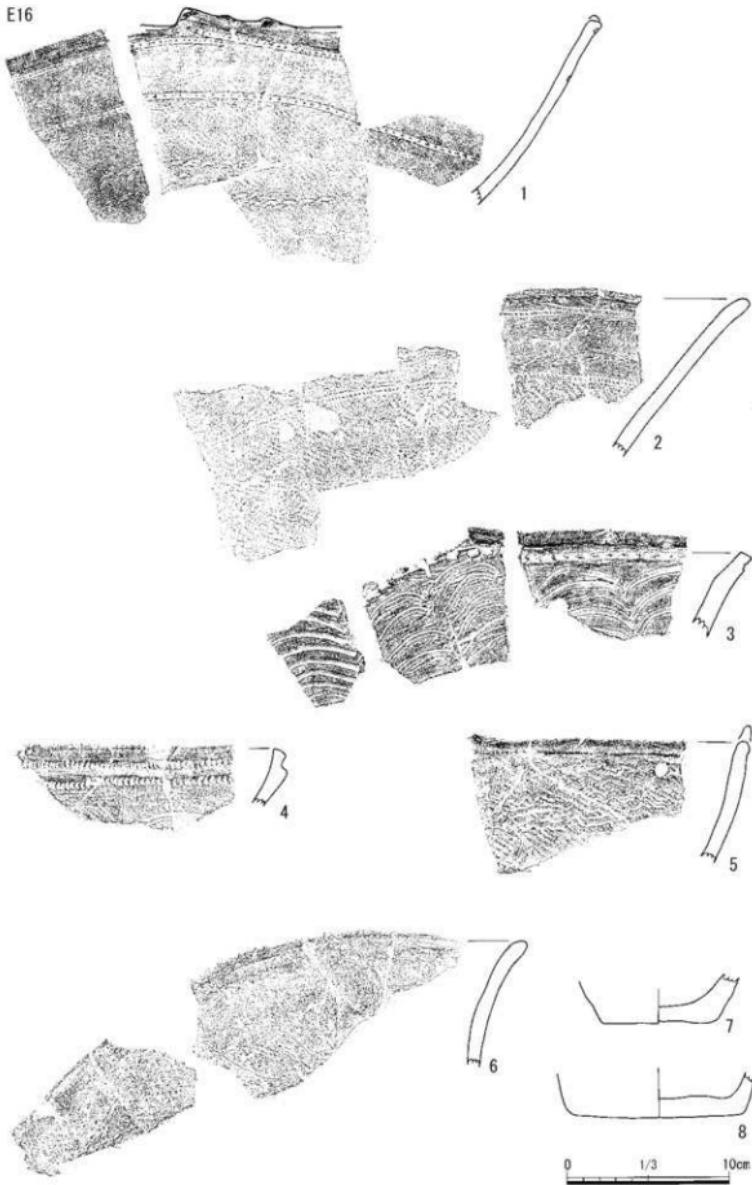
11

12

0 1/3 10cm

第30図 出土遺物 繩文時代前期（9）配石E15

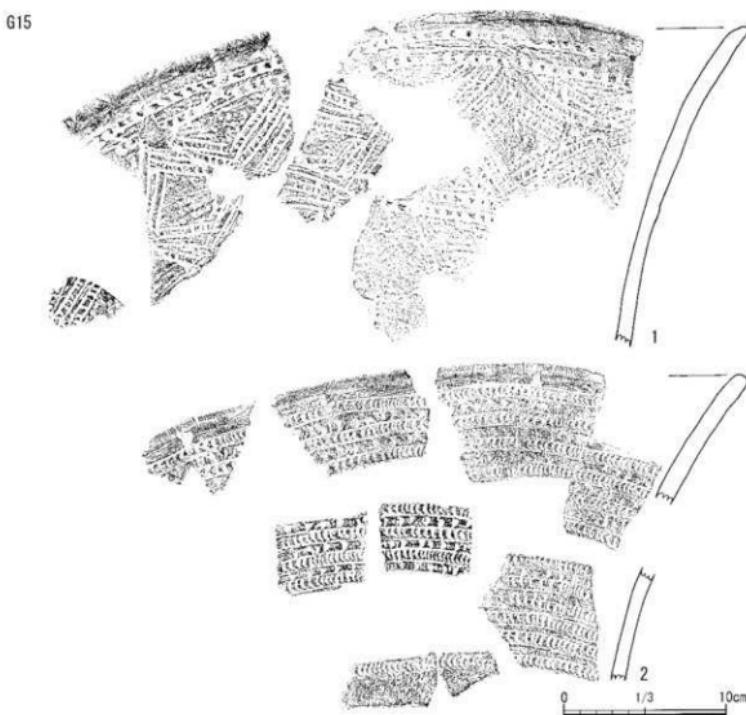
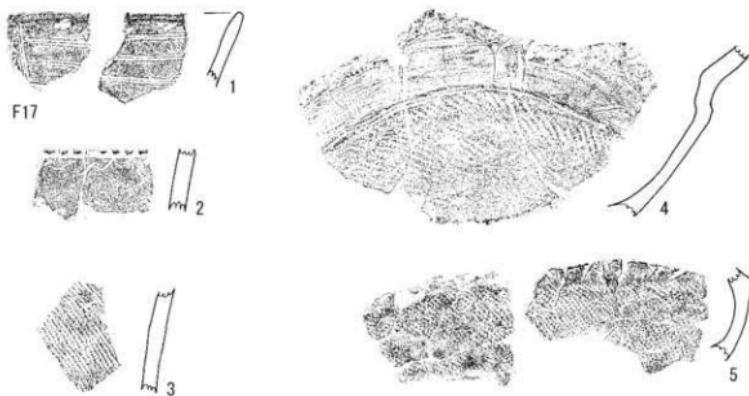
E16



第31図 出土遺物 繩文時代前期（10）配石E16



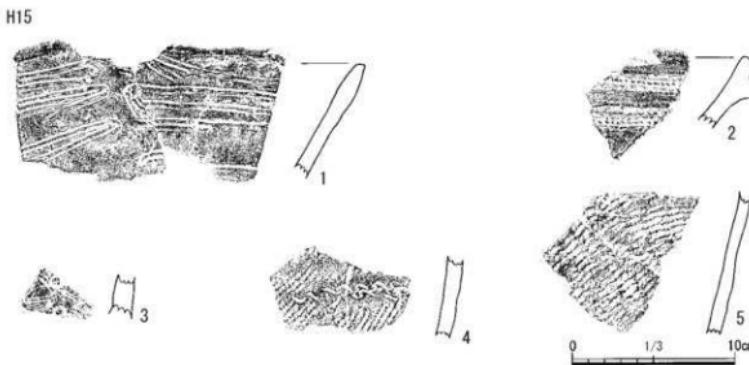
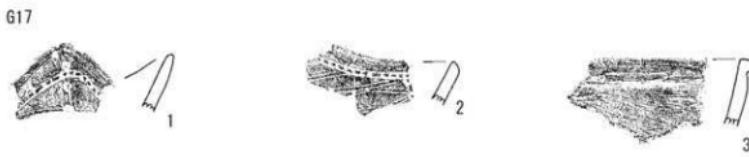
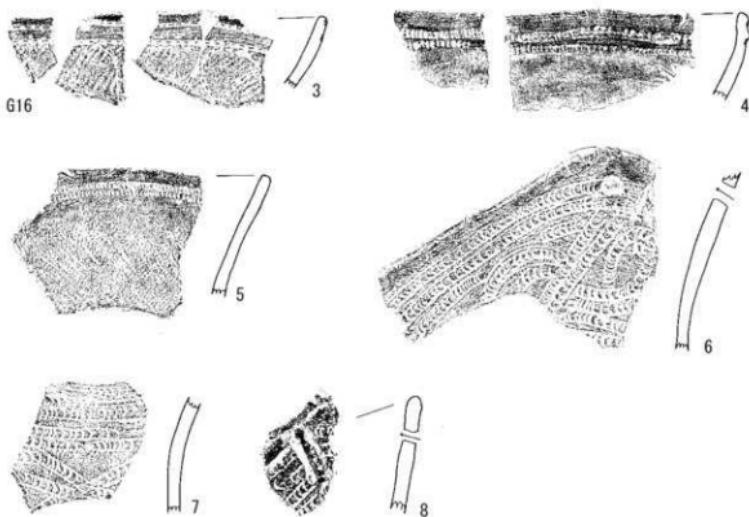
第32図 出土遺物 繩文時代前期 (11) 配石F14.15.16



第33図 出土遺物 縄文時代前期(12)配石F17.G15

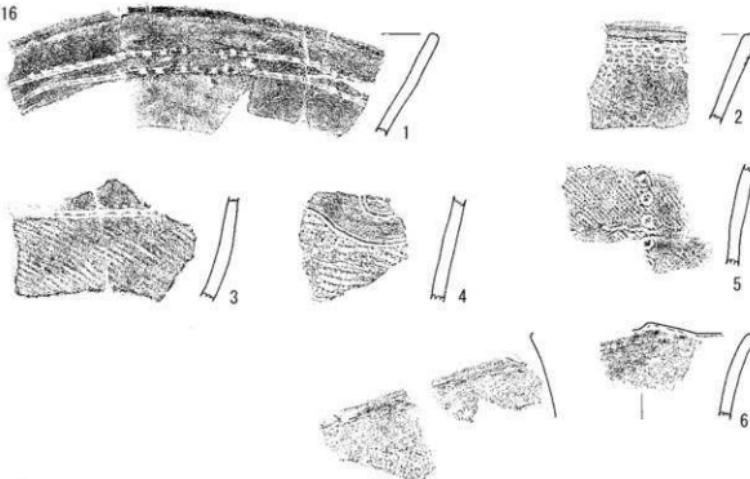


第34図 出土遺物 繩文時代前期(13) 配石G14.16

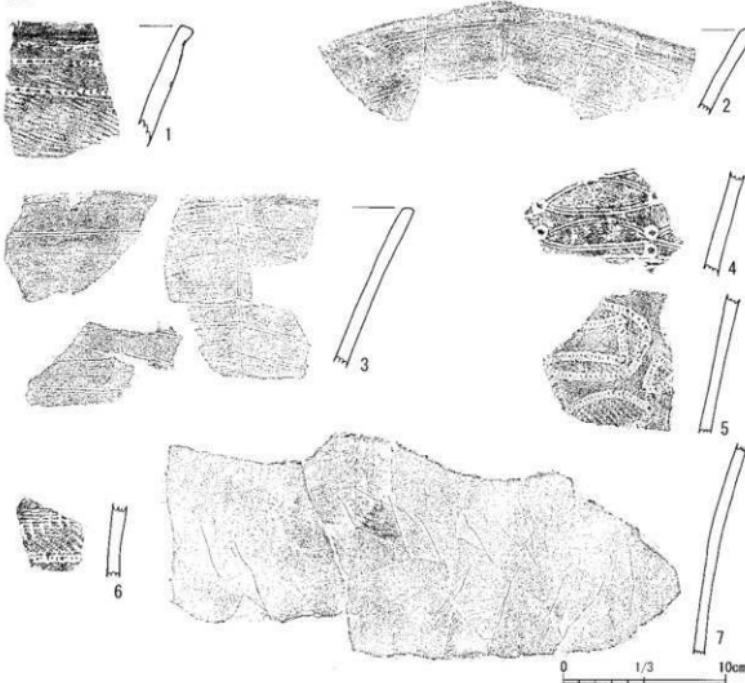


第35図 出土遺物 繩文時代前期 (14) 配石G16.17.H15

H16

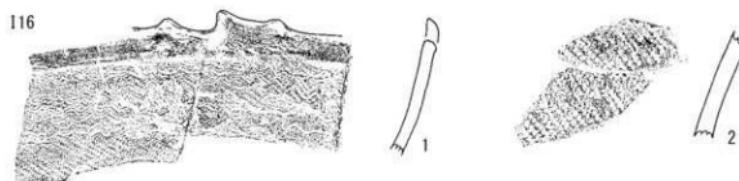


115

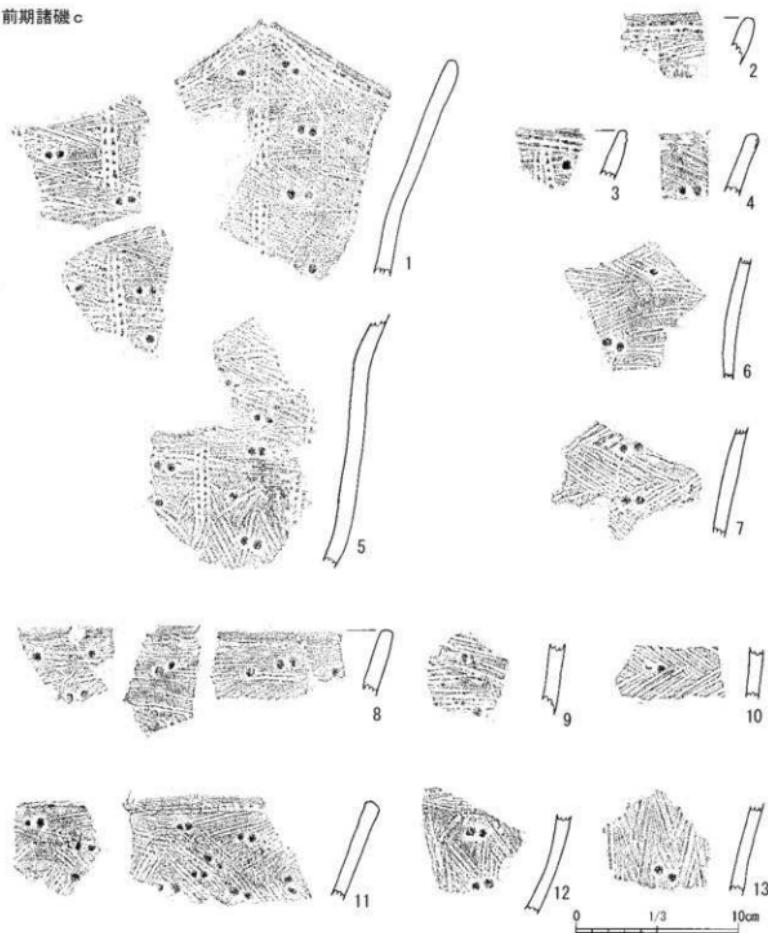


第36図 出土遺物 繩文時代前期 (15) 配石H16.115

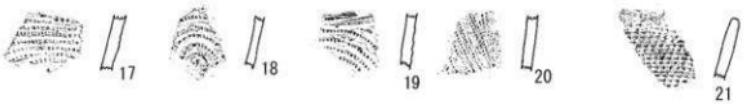
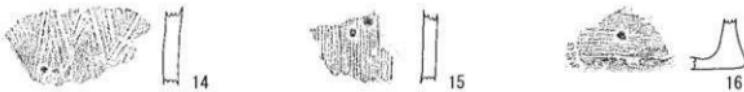
116



前期諸磧 c



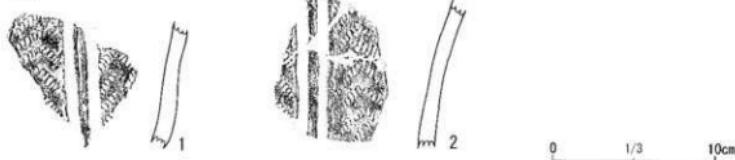
第37図 出土遺物 繩文時代前期 (16) 配石I16 諸磧 c



前期末



中期



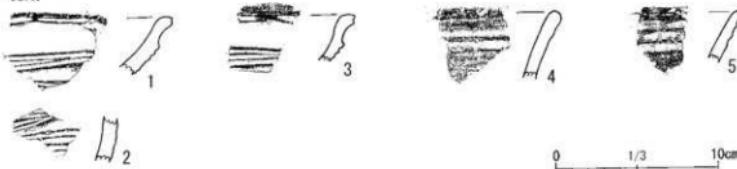
0 1/3 10cm

第38図 出土遺物 縄文時代前期末 中期

後期



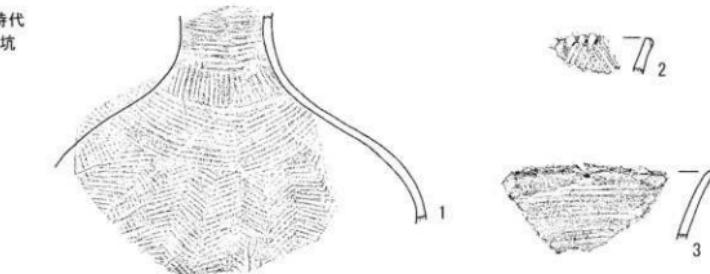
晩期



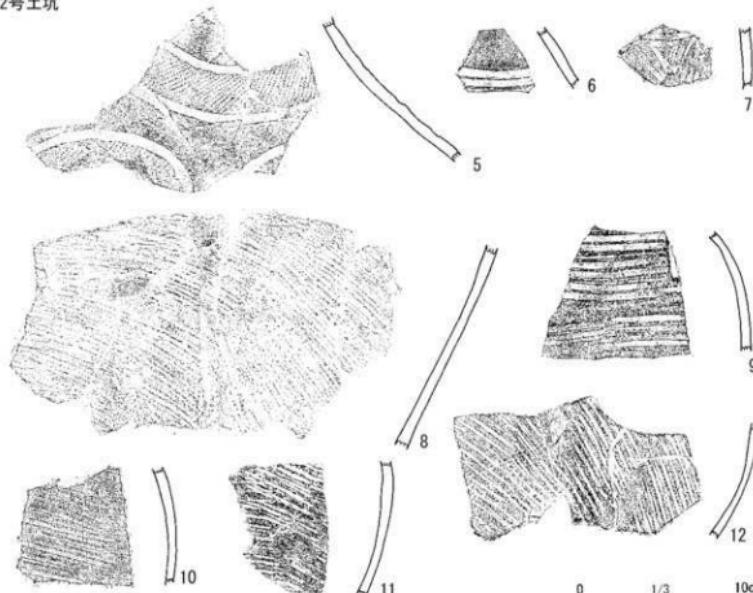
0 1/3 10cm

第39図 出土遺物 繩文時代後期 晩期

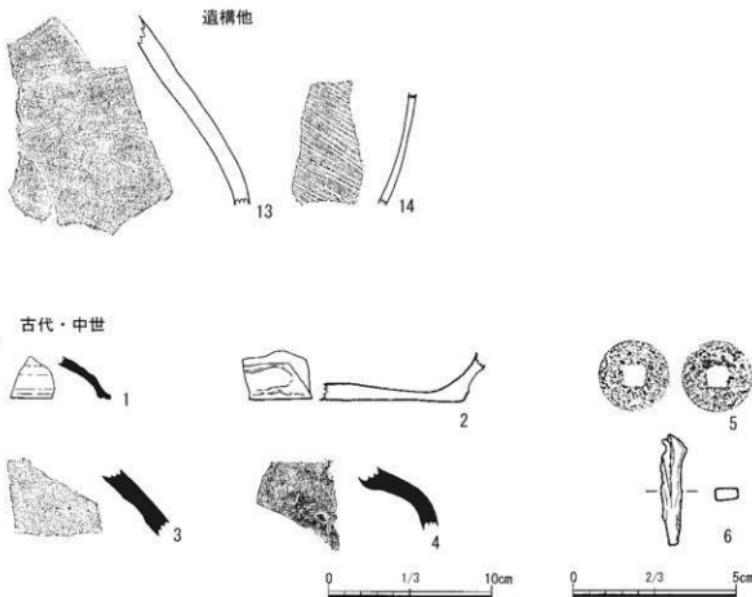
弥生時代
1号土坑



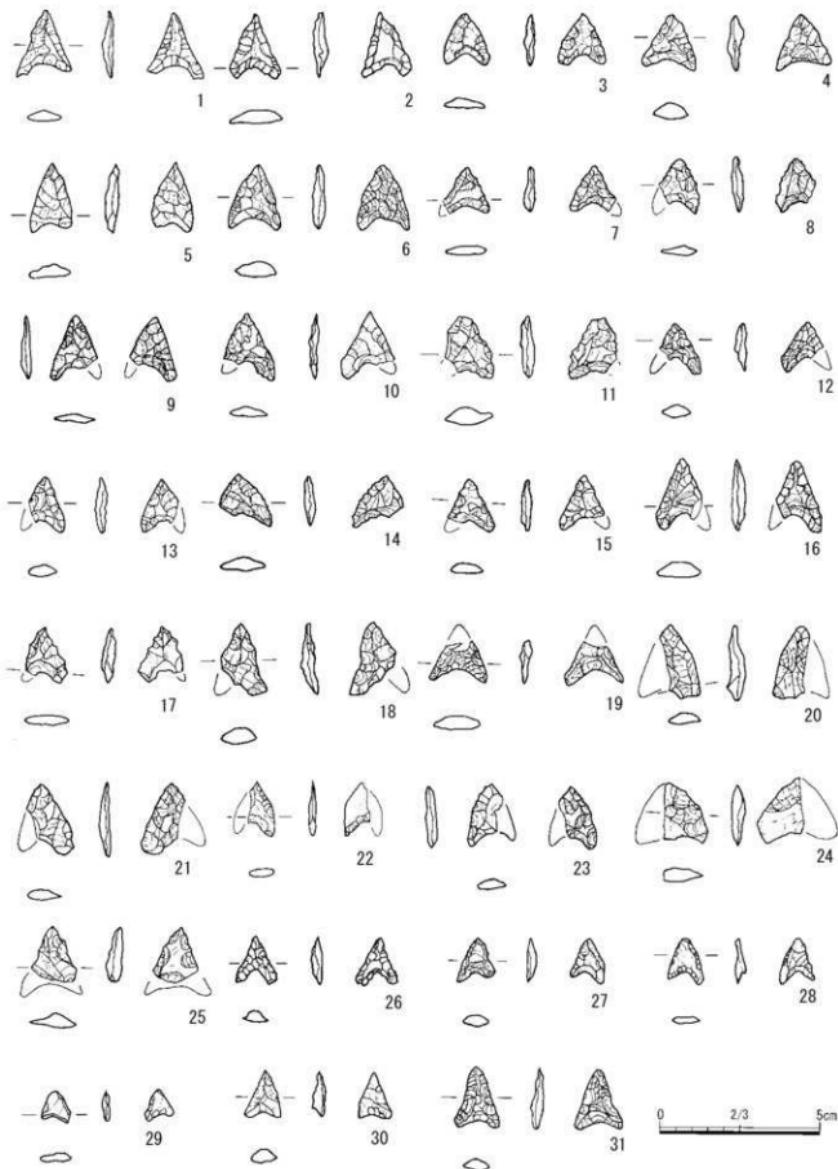
2号土坑



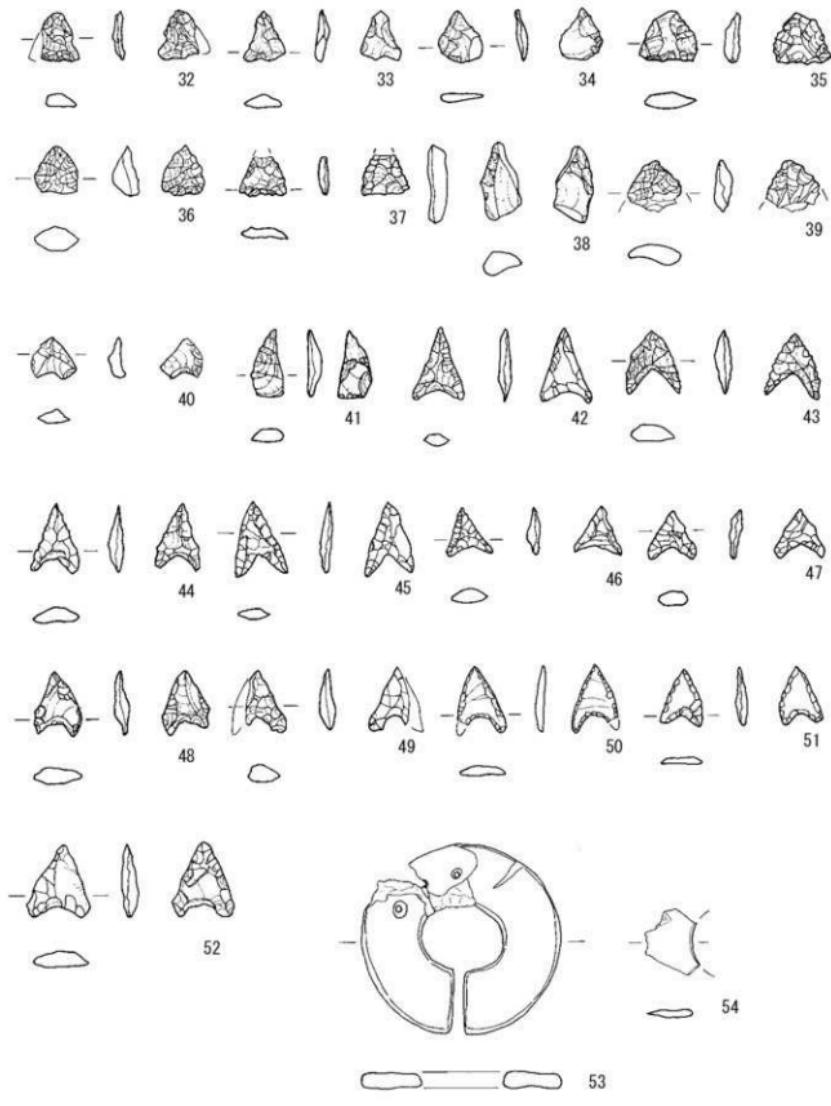
第40図 出土遺物 弥生時代（1）



第41図 出土遺物 弥生時代（2）古代・中世

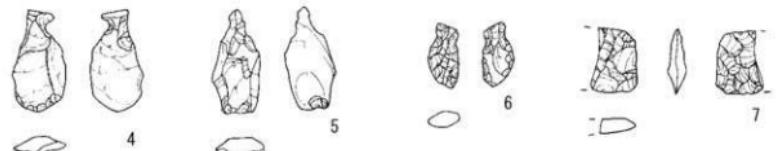
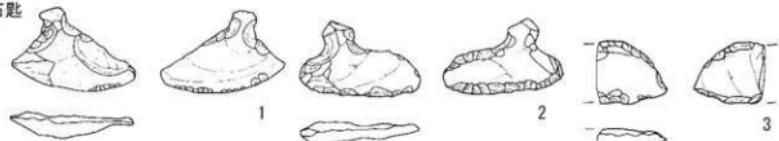


第42図 出土遺物 縄文時代石器 (1)

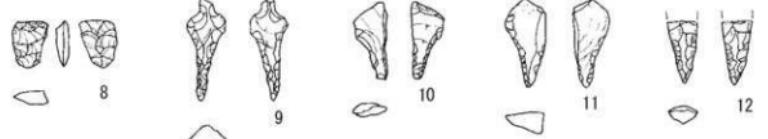


第43図 出土遺物 縄文時代石器（2）

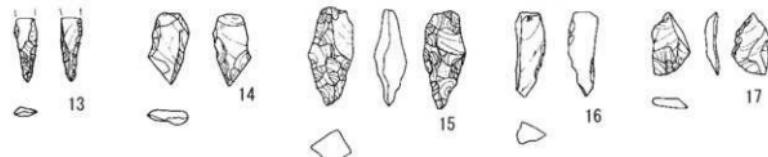
石匙



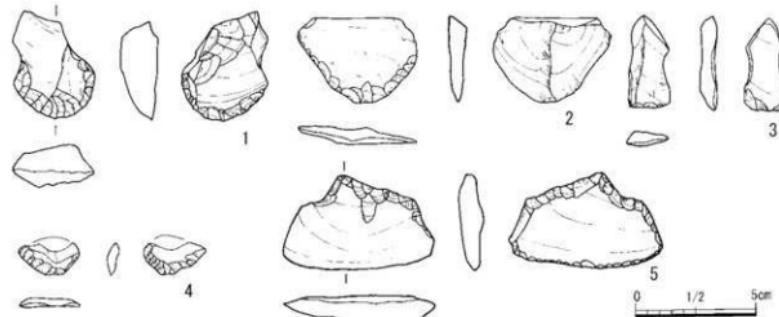
石錐



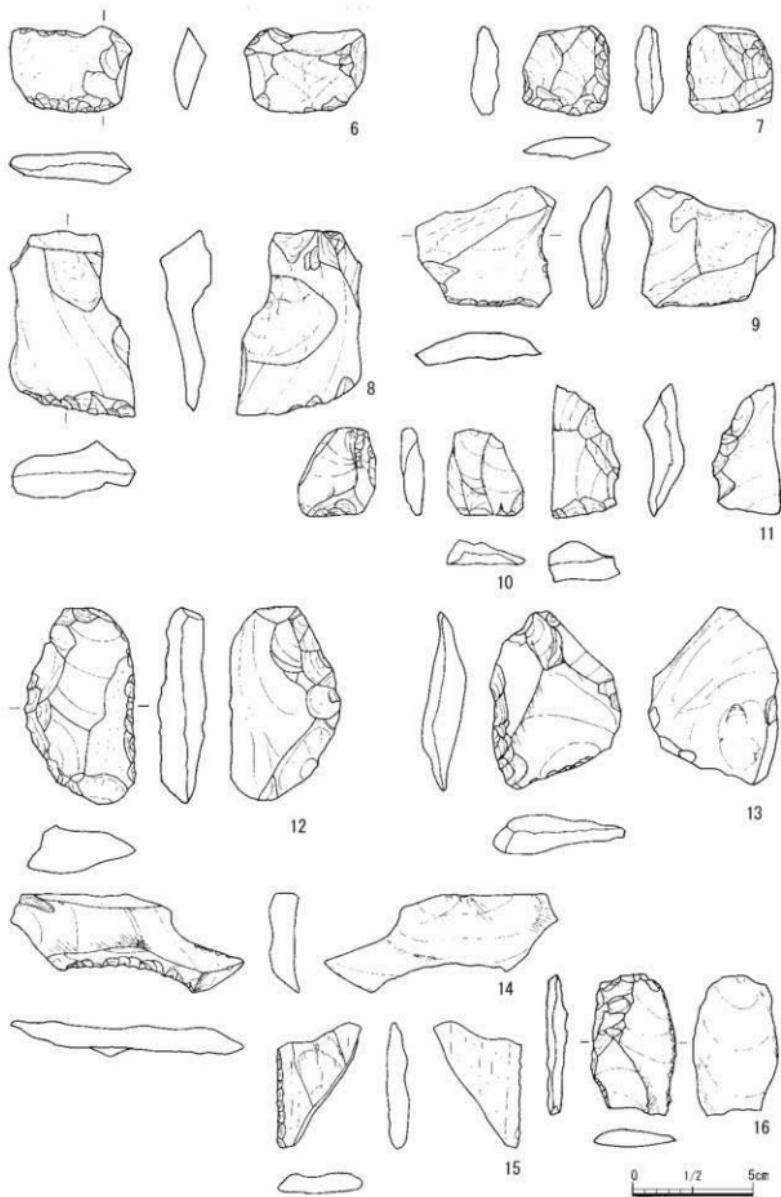
小型石器



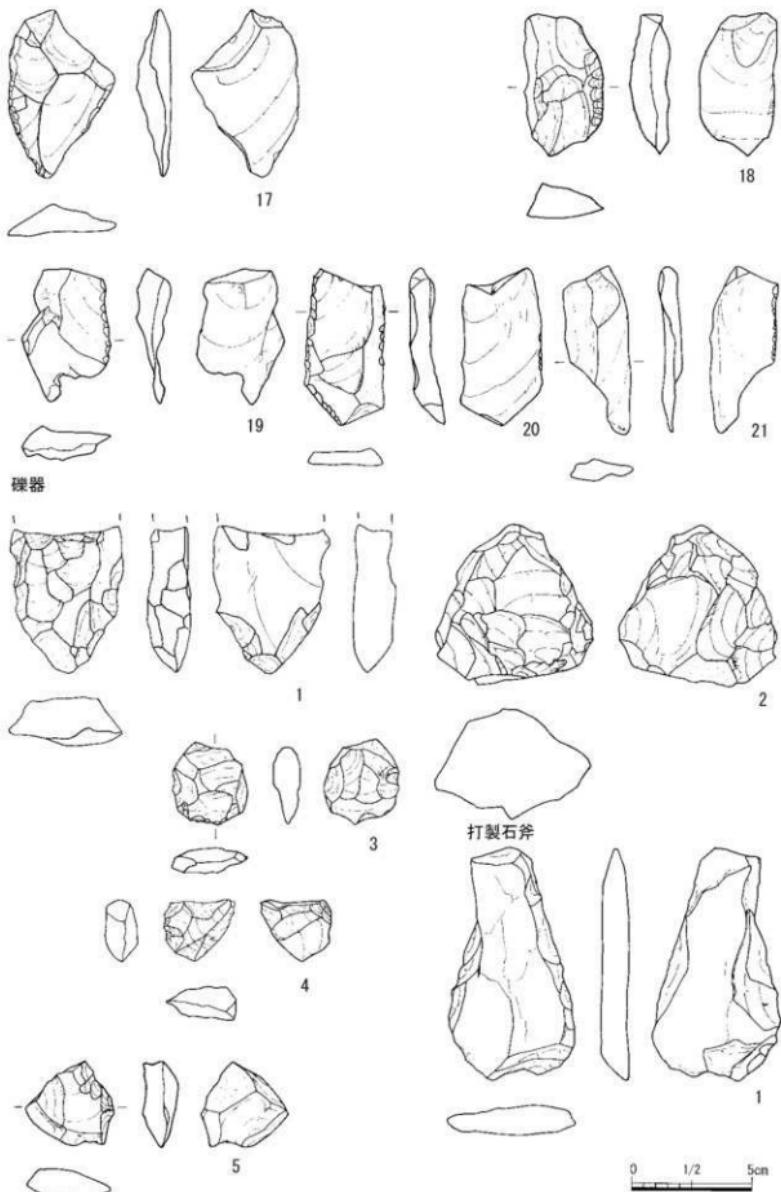
撓器・削器



第44図 出土遺物 繩文時代石器（3）



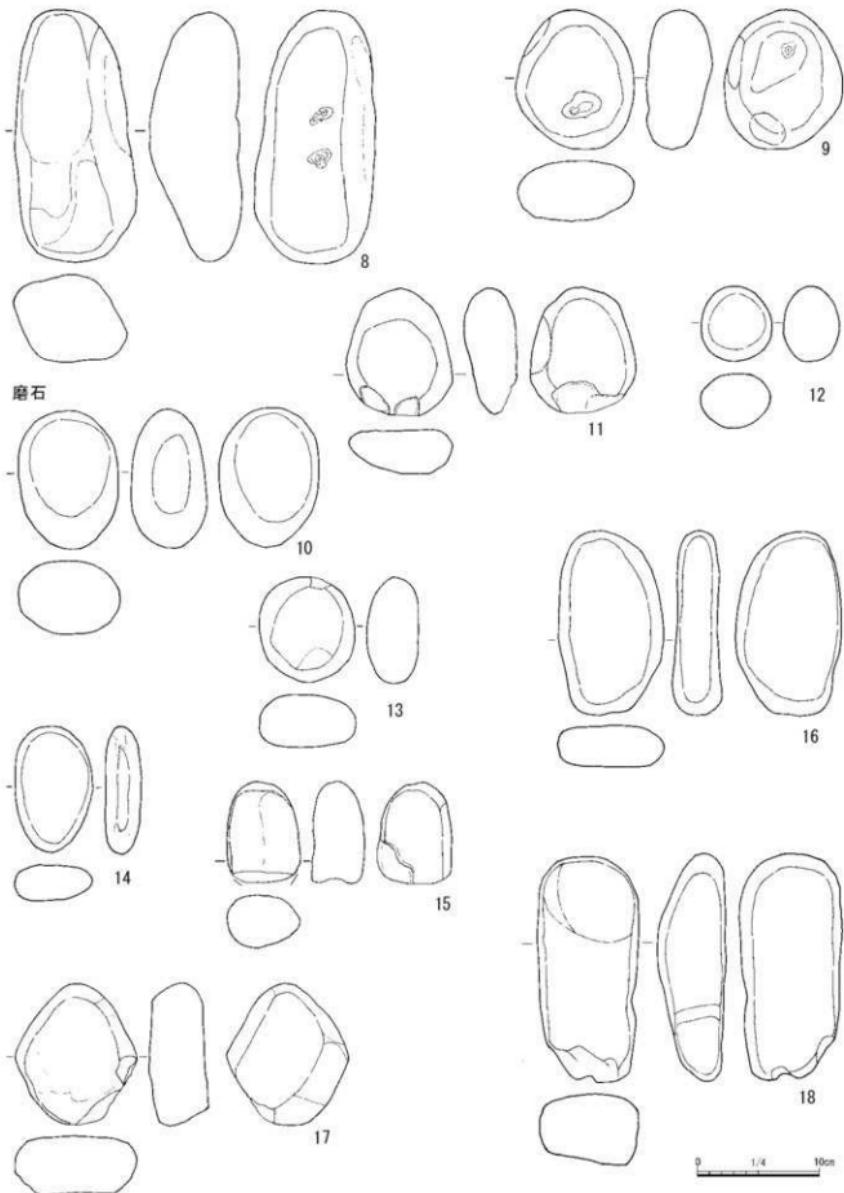
第45図 出土遺物 縄文時代石器 (4)



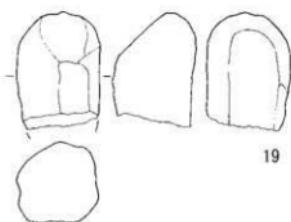
第46図 出土遺物 縄文時代石器 (5)



第47図 出土遺物 縄文時代石器 (6)



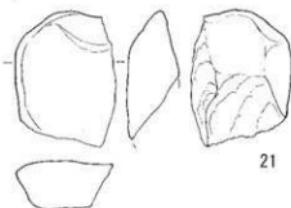
第48図 出土遺物 縄文時代石器（7）



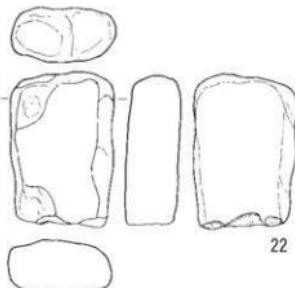
19



20

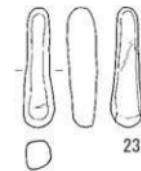


21

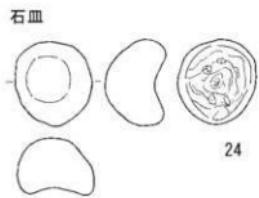


22

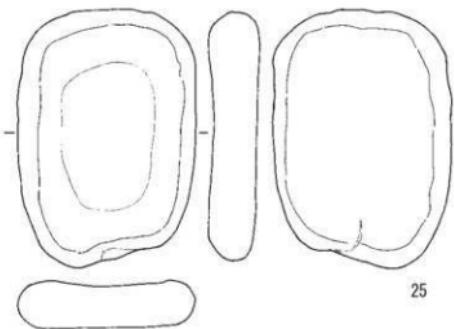
敲石



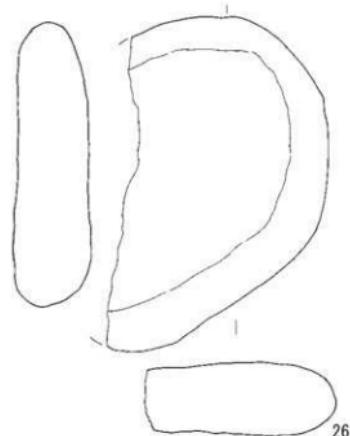
23



24

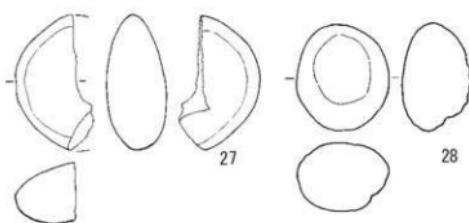


25



26

弥生石器

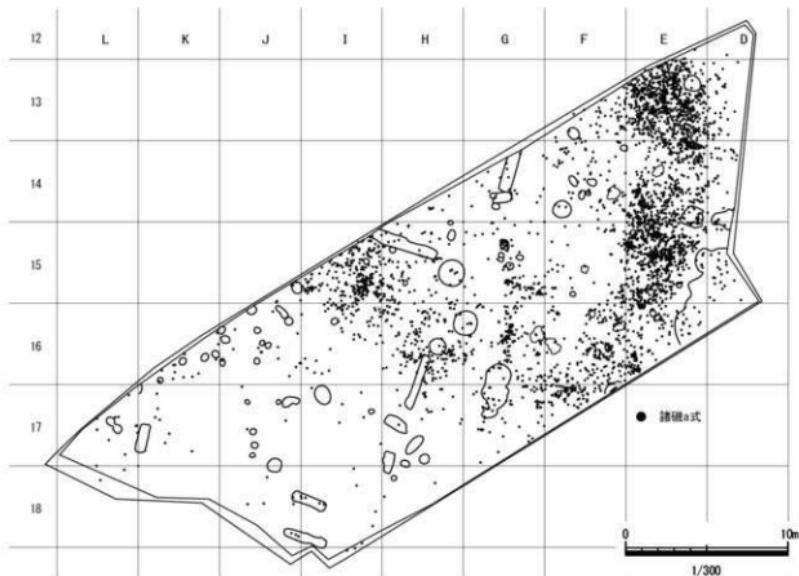
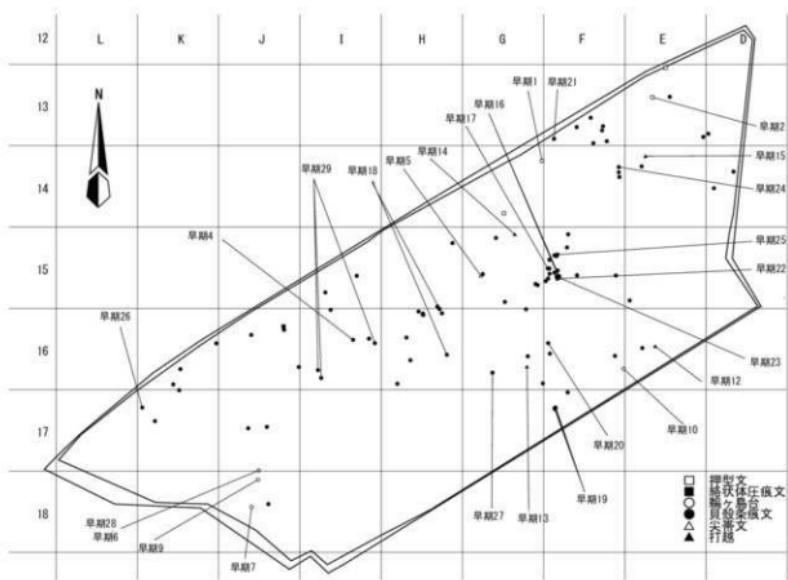


27

28

0 1/4 10cm

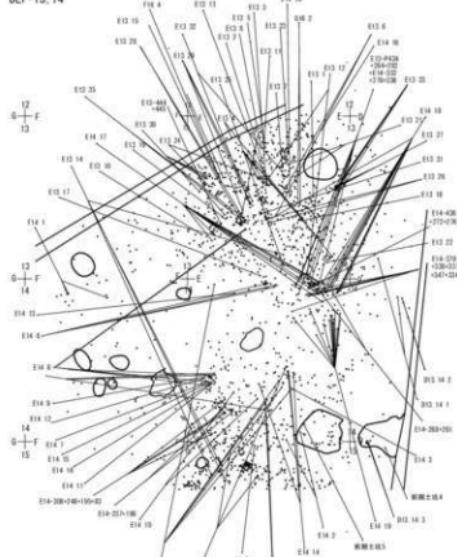
第49図 出土遺物 縄文時代石器(8)



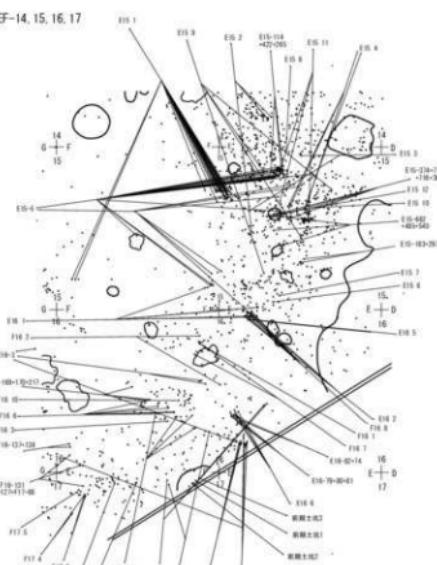
第50図 遺物出土状況 縄文時代早期 前期諸磧 a

● 諸磯 a 式

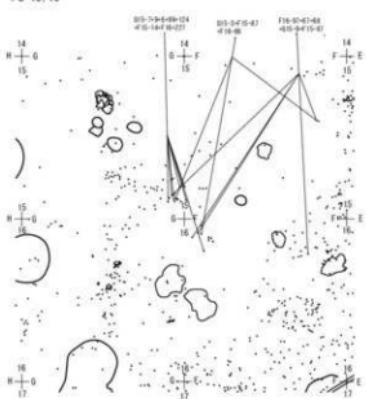
DEF-13, 14



DEF-14, 15, 16, 17



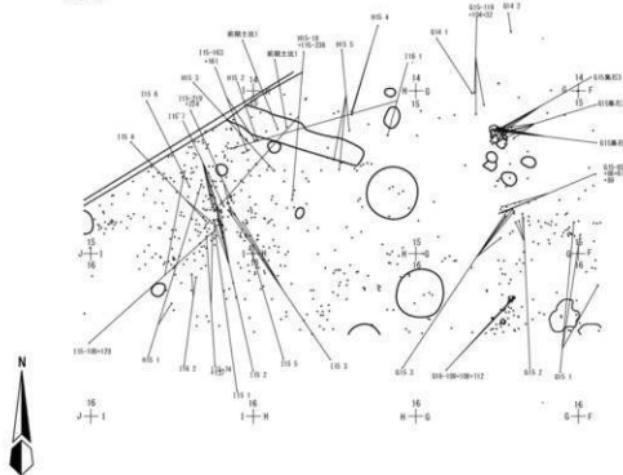
FG-15, 16



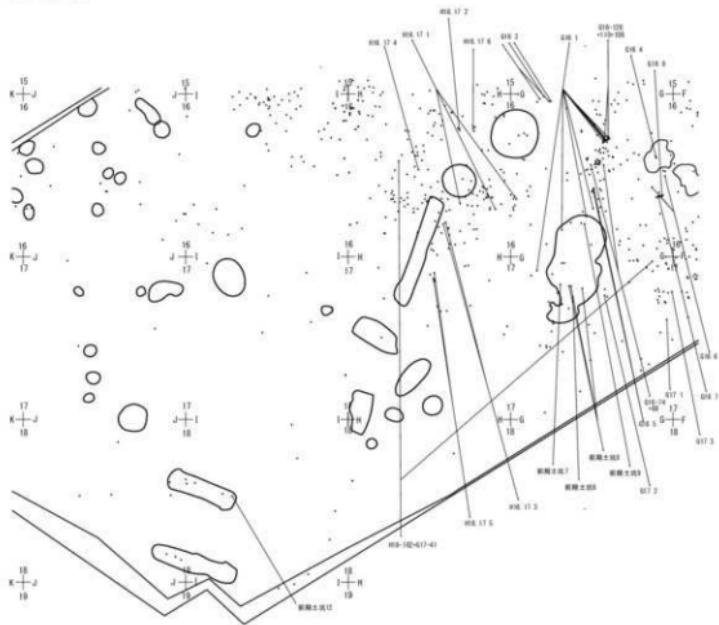
第51図 遺物出土状況 繩文時代前期諸磯 a 配石 (1)

● 諸職 a 式

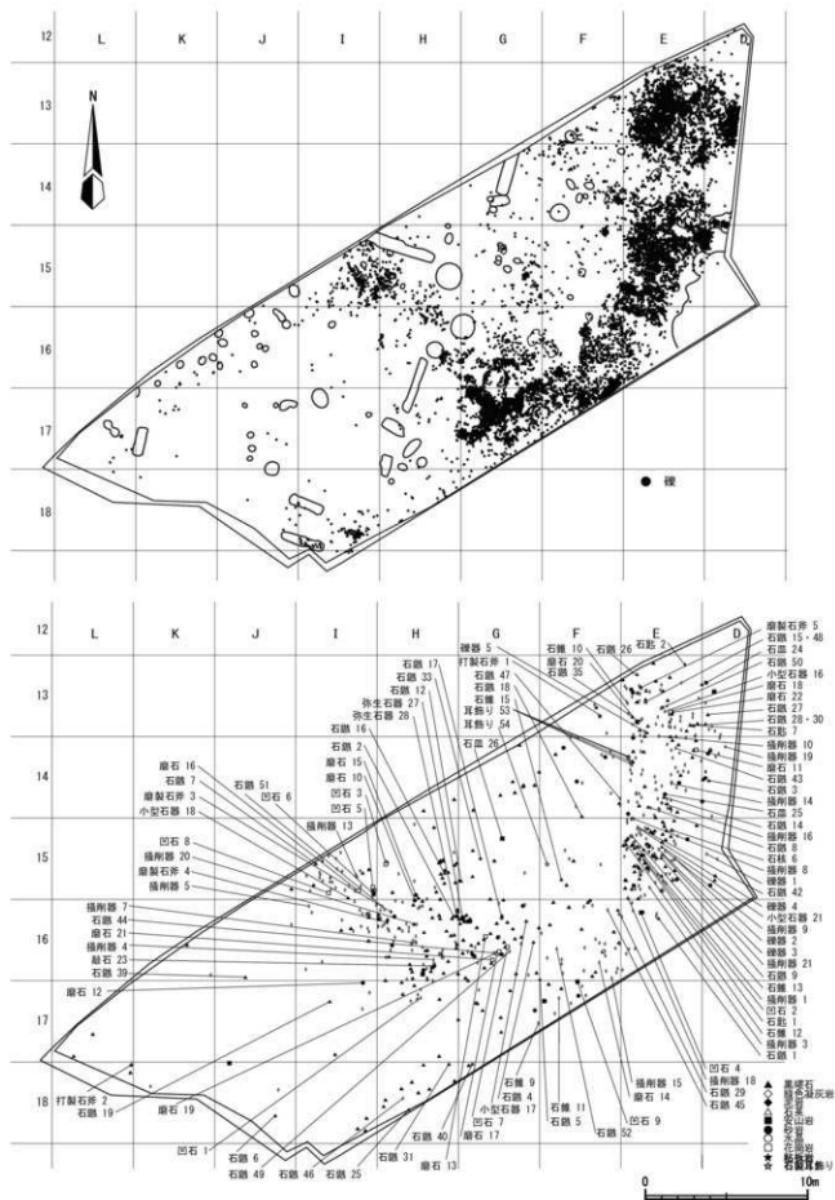
GHI-15



GHIJ-16, 17, 18

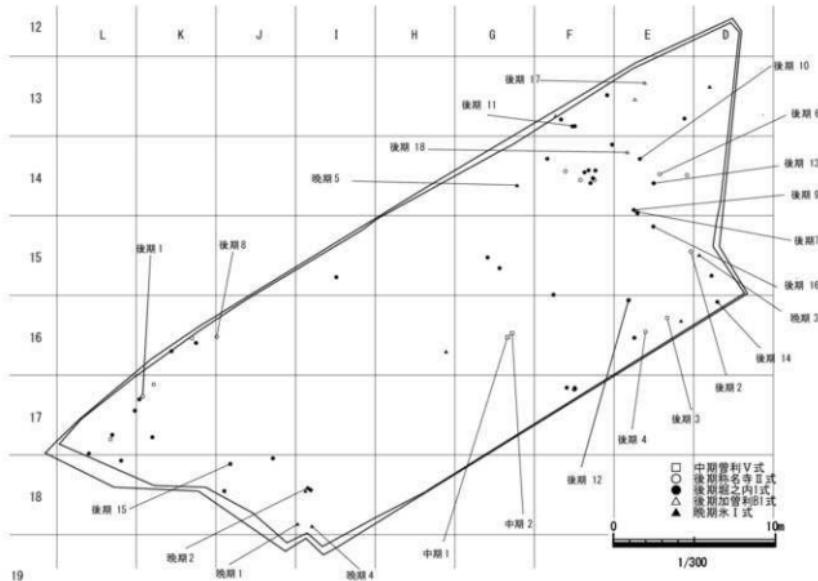
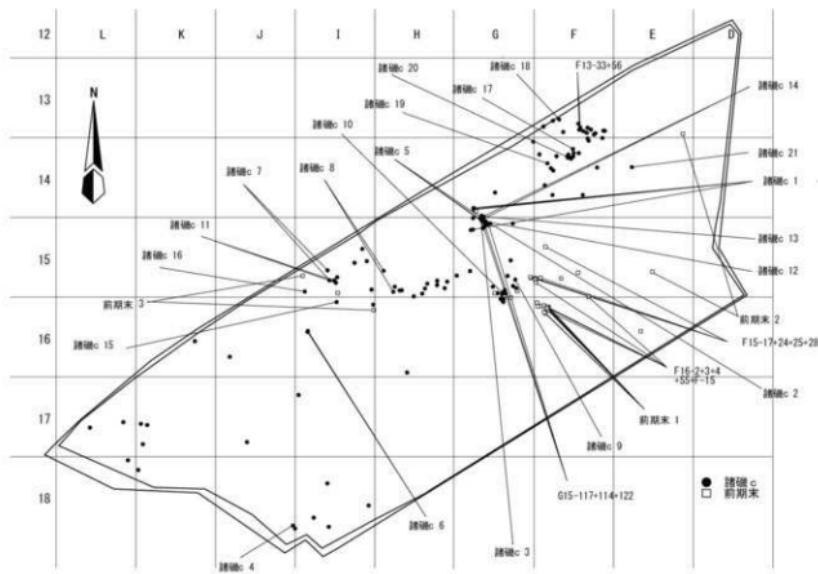


第52図 遺物出土状況 繩文時代前期諸磯a配石（2）

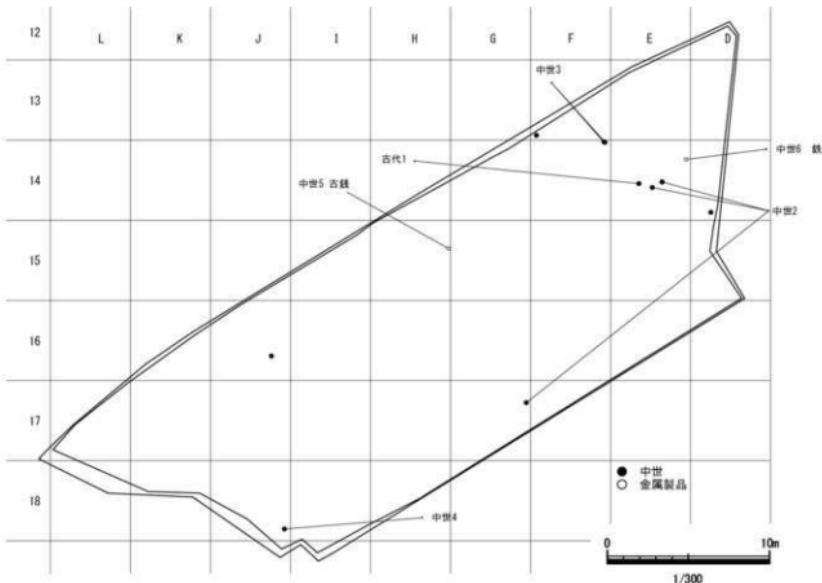
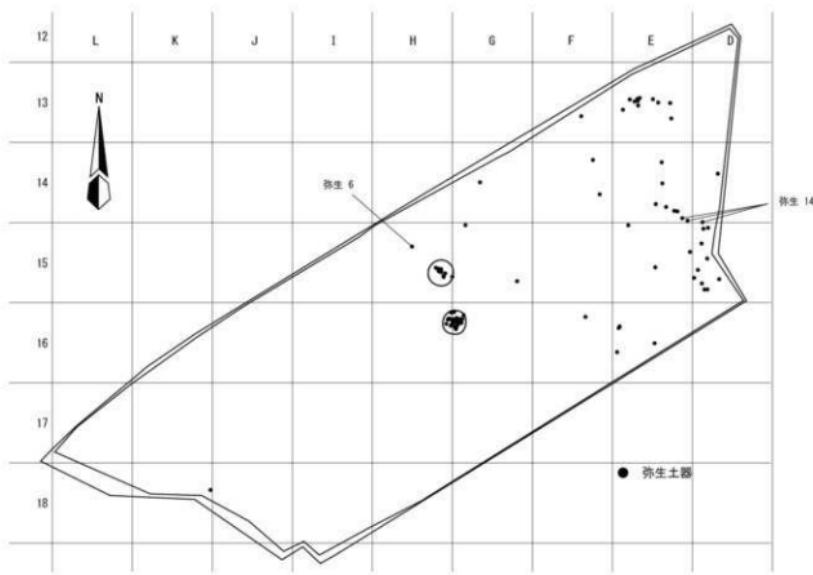


第53図 遺物出土状況 繩文時代 碟・石器

— 63 —



第54図 遺物出土状況 繩文時代前中期 中後晚期



第55図 遺物出土状況 弥生 古代・中世

土器觀察表

石器觀察表

石材分類表

名前	性別	種類		石高		販賣		貯蔵		出荷		輸出		水品		庫現行	
		点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g	点数	重量g
D13	6	569														1	0.4
D14	6	1708	2	14												2	0.2
D15	3	1424														68	79.6
E13	55	701.7	4	98												42	43.7
E14	64	831.7	7	142	2	116										78	53.2
E15	140	1214.9	5	170											1	2	
F1 Score	2	1264															
F1#	19	256.3														17	4.2
F13	2	66														2	3.1
F14	22	158.4	3	66												9	7.9
F15	31	177.7						1	6							10	9.4
F16	33	1985.3														63	56.7
F17	9	139.9	1	138										3	48		
G14	1	4														14	11.3
G15	1	4														6	9.4
G36	15	181.2	5	139.7												74	70.8
G17	7	38	1	4												23	20.9
G18																1	0.4
H14																3	0.8
H15	9	432														27	20.7
H17	29	777.5	4	120												29	25.5
H17	7	70														11	11.9
H18	1	0.4														10	4
H15	36	647.5														34	25.2
H16	17	414														9	10.5
H17	2	18														8	8.1
H18																4	3
J15																7	17.7
J16	3	64														2	1.6
J17	3	32															
J18	1	28	1	2										1	18		
K16	1	376														3	3.8
K17																1	3.5
K18	1	30														1	1.4
L17																1	1.4
M16	1	51														31	26.2
M17	5996.8	33	1946	2	116	1	6	5	345.2	3	192	4	7.8	1	2	596	53.2

第4章 総括

美通遺跡D区においては、縄文時代の早期押型文土器、鵜ヶ島台式などの条痕文土器、早期末の打越式土器、前期後半の諸磯a式期の環状配石、諸磯c式土器、前期末土器、中期後半曾利V式土器、後期の称名寺II式、堀之内I式、加曾利B1式、晚期水I式土器、弥生時代中期初頭の土坑、古墳時代後期、中世の遺物がみつかり、長期間にわたって断続的に生活痕跡がみられる。これまでのA区～C区の調査成果とあわせてみると、朝日川と菅野川にはさまれた段丘上の土地利用に時代的な差異がみてとれる。

最も古いのは早期前半の押型文土器であり、C区・D区で出土している。この段丘の基盤となる猿橋溶岩が上杉陽氏の資料で $8,530 \pm 170$ BPとされており、ほぼ同じ年代となる。早期はこの他に子母口式や鵜ヶ島台式土器など条痕文土器がB区1～C区・D区から出土しており、貝殻腹縁文を特徴とする早期末の打越式土器も同様で、昭和47年の調査においても確認され、段丘上の北半部で広く出土がみられる。該期の土器は美通遺跡周辺では同じ都留バイパスで調査を行った玉川金山遺跡で子母口式期、鵜ヶ島台式期の炉穴などの遺構がみつかっており、菅野川や朝日川流域に生活圏を持っていたことがうかがえる。

前期にはいるとB区で黒浜式期の住居跡がみつかっており、諸磯a式期へ連続していく様相は関東地方の集落のあり方と同一である。関東地方西部では貝塚を伴って多くみられるが、山梨県内では該期の遺跡は極端に少ない。山梨県内での諸磯a式期の遺跡は、笛吹市祝迦堂遺跡塚越北Aで黒浜式期から連続して集落を形成しており、甲州市獅子之前遺跡では諸磯a式期集落、他に一の沢遺跡は土坑などといった散発的な状況にある。D区では、諸磯a式期に限って環状配石を築いているが、美通遺跡全体でみればB区での黒浜式期から続く生活の場としている。諸磯b式はD区ではみられず、諸磯c式後半期までのあいだは空白となる。前期末はB・C区で遺構があるが、D区では土器片が僅かにみつかっており、生活圏としていることがわかる。

中期後半にはB区で集落を形成するが、D区にはまったくといってよいほど何もみられない。後期の称名寺式土器や堀之内式土器、晚期土器などが散在する様相は、C区と同様であるがその量はわずかで希薄である。

弥生時代の遺構は、D区では2基の土坑から土器が出土している。縄文時代包含層の上層にあたる砂利状のスコリア土層を覆土としている。該期の土坑はB区4やC区でも確認されており、B区4の土坑からは石鎧や打製石斧がみつかっている。D区においても弥生土器の壺や甕形土器の他に磨石や石鐵が出土していることから墓坑である可能性が高い。遺跡全体に広く弥生時代の土坑が広がっており、美通遺跡の南にあたる生出山の山頂や朝日川をさかのぼった天正寺遺跡などでも該期の土器の出土が知られ、この地域に広くみられる。

古代では古墳時代後期の須恵器蓋の小破片が1片みられたのみである。中世では5号土坑より常滑大甕の小片がみつかっている。C区での呼称にならいD区でも遺構名を溝としたが、主軸がそろっており平安期以降にみられる墓坑である可能性が高い。覆土は弥生時代の土坑と変わらず、遺物が伴わなければ時期的な区別は困難で、時期を明確にできていないものがある。奈良・平安時代について住居跡等の遺構がA区及びC区のようにみられず、遺物もない。D区において古銭・鉄器がわずかに出土しているが、古代以降は明確でない。

縄文時代前期の環状配石は、調査区域の北東部から拳大礫を主体とした直径25m幅6m程のドーナツ状にみられた。礫に伴って縄文時代前期の諸磯a式土器に限って出土している。遺構の半分は北西側の調査区外に広がっているものと思われ、全体の半分を調査した。主だった礫は位置を記録し、調査区域内だけで約9,800点を計上した。その分布状況をみると（第53図）環状を呈していることがわかる。あわせて諸磯a式土器（第50図）並びに石器及び石材についても同じく環状に出土している。礫は小さくまとまるではなく範囲内に散在している状況であった。特に北東側のE13、E14、E15グリッド付近で礫は厚く、約20cmの深さまでみられた。礫の下には特に掘り込み等は検出できず、礫の埋設ではなく積み上げながら形成されたものと思われる。また南西側H15.16グリッド付近では礫は薄く1層の掘り下げで出土しなくなる。F17グリッドで土坑を伴う礫のまとまりを検出し、集石土坑としたが、これまでのB区、C区でひろくみられた集石土坑と同じものである。礫を取り上げながら掘り下げていったが、他にこうした集石土坑はみられなかった。このため長野県原村の阿久遺跡にみられるような

集石土坑が集まって環状を呈するものではない。また配石中の下層より焼土を数カ所検出し、EF15.16グリッドに集中する傾向にある。明確な掘り込みを持つものは少なく、配石に伴うものではあるが、この上部には疊が散在しており、使用状況を示すものはなかった。竪穴住居跡である可能性も考慮し、先行してトレンチ調査を行ったが、下部から遺構等は検出できず層序にも性格を示す特徴はみられなかった。

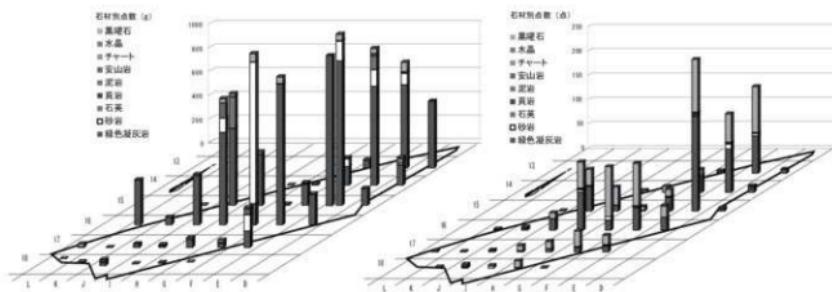
環状に石を配列させたいわゆる環状列石は、縄文時代中期末から後期以降に東日本を中心ひろくみられるが、前期の環状列石は例が少ない。長野県大町市上原遺跡は立石によるものである。配石によるものは長野県原村の国史跡阿久遺跡が知られている。阿久遺跡は、前期の集落であり、諸磯a式期から小規模な集石群からなる環状配石を形成し始めている。直径1m前後の円形、楕円形、多角形状の集石21グループ271基からなる径120m×90m、幅30mの環状配石で、中心部には土坑群、蓼科山を望む立石と列石をともなっている。また長野市上浅野遺跡は前期諸磯b式期に形成され、68基の集石群を直径40mの円形内に配置し、立石、列石がその内側にみられる。諸磯b式の浅鉢形土器が多く、また阿久遺跡と同様に小規模な集石から構成されている。上浅野遺跡では集石直下に浅鉢形土器が埋納される例が多く、遺跡から浅鉢形土器200個体以上が出土し、石樵、石皿、石錐、スクレイバーなど石器類もみられる。諸磯a式期は土器の組成に浅鉢形土器が加わり、多様な器種がそろって生活スタイルの変化がうかがえる時期でもある。こうした環状集石は、諸磯式a～b式期に始まり、環状を呈すること、集石面に多くの土器・石器をもつこと、石器も一般的な器種がそろっており剥片などから製作に関わるものが多いこと（第56図）は、美通遺跡と共通する。しかし、規模がやはり小さいことと、土器には浅鉢形土器がめだつものの圧倒的な存在ではないこと、単位となる集石と土器埋納、そして立石、列石が明確でないことが異なる。

美通遺跡B区4においてもD区に先行して前期黒浜期に散漫ではあるがこうした配石が存在する。配石は小規模であるが、比較的狭い範囲にまとまっており、ところによっては大きな石を伴う。時期的には一段階前となる黒浜期であり、環状配石に連続してくるものとみなすことができる。B区、C区には小規模な集石土坑が散在しており、こうした遺構があつまって形成したものが阿久遺跡や上浅野遺跡の環状配石であり、美通遺跡D区の環状配石は同じ性格のものと考えることができる。美通遺跡の環状集石は、焼土の存在から火を伴う行為、また疊の撒入、黒曜石の加工、緑色凝灰岩石器製作、土器廃棄、集石に伴う土器埋設、こうした行為の積み重ねによつて形成されている。その機能については明確にしえないが、以後は生活の場として利用されないことも含めて、他例と同じく生活スタイルの変化と共に形成された地域一帯の共同祭祀の場であり、記念物であると考えておく。

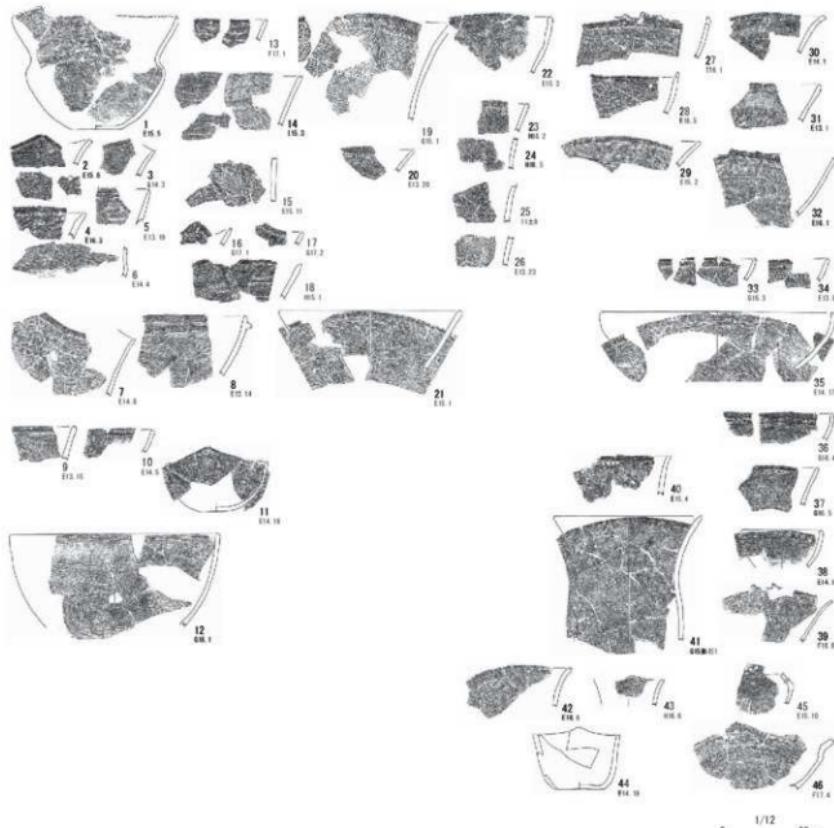
山梨県内において諸磯a式土器は少なく、関東地方とは対照的である。これまで积迦堂遺跡塚越北A、獅子之前遺跡で住居跡の調査例が知られている。本遺跡での諸磯a式土器の文様は口縁部と胴部の二つの文様帶に分かれる（第57図）。口縁部文様帶は横位爪形文により上端及び下端を区画した間に肋骨文、木葉文、弧線文などが施され、その下の胴部文様帶は縄文となる。口縁部文様帶には、上弧肋骨文(1)、木葉肋骨文(2～6)、流水文(18)、横線肋骨文(13.14)、斜線肋骨文(15)といった沈線あるいは円形竹管文(22～26)による縱区画文様、そして菱形文(19.20)、弧線文(21)、入組木葉文(7～12)、波状文(27～29)といった横帶文様、さらに文様を省略して無文とするもの(30～35)がある。この他に口唇部直下に横位爪形文をめぐらせ以下を縄文(36～38)、あるいは全面縄文のみ(40.41)とする土器がある。菱形文はあるが、西関東地方に多いわゆる米字文はみられない。区画線を残して文様を省略して無文とするものは多く、獅子之前遺跡、一の沢遺跡と同じ傾向にある。各文様においてそれぞれ浅鉢形土器(8.11.12.32～36.38.44)がみられる。有孔土器(45)はわずかである。

参考文献

- 長野県教育委員会 1982『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書原村その5』
豊野町教育委員会 1983『上浅野・豊野町上浅野遺跡緊急発掘調査報告書-』
山梨県教育委員会 1986『积迦堂I』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第17集
山梨県教育委員会 1991『獅子之前遺跡発掘調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第61集
松田光太郎 1993『諸磯a式土器の文様とその変遷』『古代文化』45-6
関根真二 2008『諸磯a式土器』『総覧縄文土器』アム・プロモーション



第56図 グリッド別石器石材重量、点数グラフ



第57図 諸磯 a 式土器の分類



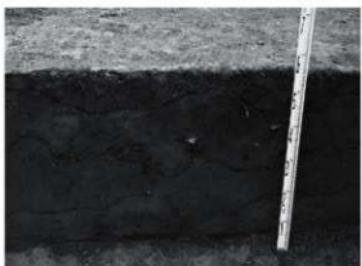
美通遺跡D区 崖線付近層序



美通遺跡D区 土層堆積状況



美通遺跡D区 基本層序



遺構面から掘り下げる下層部地層



配石 DE15グリッド



配石 E13.14グリッド



配石 E13グリッド上層



配石 E13グリッドの遺物出土状況

写真図版2



配石 E13グリッド中層



配石 E13グリッド下層



配石 E13グリッド下層 遺物出土状況



配石 E15グリッド上層



配石 E15グリッド中層



配石 E15グリッド遺物出土状況



配石 E15グリッド下層



配石 F14グリッド遺物出土状況



配石 E14グリッド耳飾り出土状況



配石 E14グリッド耳飾り出土状況



配石 F16グリッド



配石 FG16.17グリッド



配石 GH16グリッド上層



配石 H15グリッド上層



配石 I15グリッド中層



集石土坑 F17グリッド

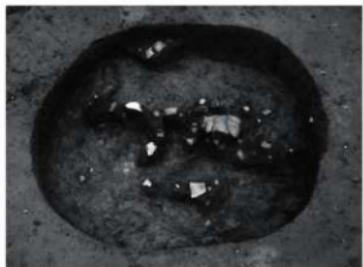
写真図版 4



1号土坑



1号土坑 遺物出土状況



2号土坑



2号土坑 土層



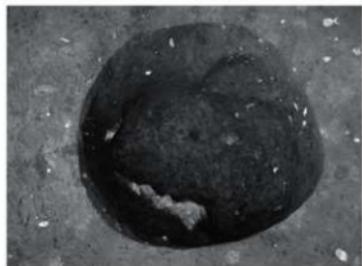
3号土坑



3号土坑 土層



4号土坑



6号土坑



7号土坑



9号土坑



8号土坑



8号土坑 土層



10号土坑



10号土坑 土層



11号土坑



11号土坑 土層

写真図版 6



12号土坑



1号溝



4号溝



5号溝



6号溝



7号溝



G15集石



G15集石 遺物出土状況



焼土 E14グリッド



焼土 E15グリッド



焼土 F14グリッド



焼土 F15グリッド



焼土 F16グリッド 1号



焼土 F16グリッド 2号



焼土 FG16グリッド 東側



焼土 FG16グリッド 西側

写真図版 8



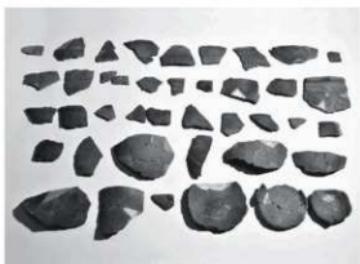
縄文時代早期の土器



土坑、溝出土前期土器



G15集石出土土器



配石出土土器 DE13グリッド



配石出土土器 E14グリッド



配石出土土器 E15グリッド



配石出土土器 E14.15グリッド



配石出土土器 E16グリッド



配石出土土器 F列グリッド



配石出土土器 G列グリッド



配石出土土器 HI列グリッド



縄文前期 諸磯c式土器



縄文前中期、中期、後期、晚期土器



弥生 1号土坑出土土器

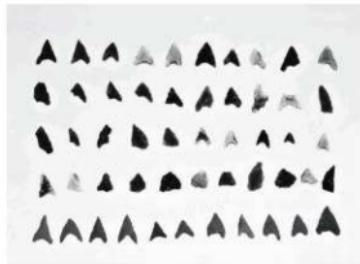


弥生 2号土坑他出土土器



古代・中世出土遺物

写真図版10



石鏃



石匙、石錐



搔器、削器



石核、打製石斧、磨製石斧



凹石、磨石



石皿



玦状耳飾り



弥生石器

報告書抄録

ふりがな	みとおしいせき でいく					
書名	美通遺跡D区					
副題	一般国道139号（都留バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書					
シリーズ名	山梨県埋蔵文化財センター調査報告書					
シリーズ番号	283集					
著者名	今福利恵 土橋寛仁					
発行者	山梨県教育委員会、国土交通省関東地方整備局					
編集機関	山梨県埋蔵文化財センター					
所在地・電話	〒400-1508 山梨県甲府市下曾根町923 TEL 055-266-3016					
発行年月日	2012年3月23日					
ふりがな	ふりがな	コード	北緯	東経	調査期間	調査面積m ²
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号			
みとおしいせき	やまなしけん つるしいくら	19204	都留31	35° 34' 33.26"	138° 56' 3.4"	平成23年5月25日 ~9月2日
美通遺跡	山梨県都留市 井倉258他					756m ²
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項	
美通遺跡	集落跡	縄文・弥生・中世	環状配石・集石 遺構・土坑	縄文土器・石器 弥生土器	縄文時代前期諸磯a式期の環状配石遺構を検出	
要約	平成20年度から行われた発掘調査区域のうち北東部端となるD区の調査である。縄文時代を中心に弥生時代、中世がみられる。縄文時代は集石土坑の他、大量の礫にて幅約6mで直径25m程となる環状配石が前期後半の諸磯a式土器と共にみられた。礫に伴い焼土を検出した。弥生時代は、土坑を検出した。中世は土坑、溝、ピットがみられるが、遺物はわずかであった。					

山梨県埋蔵文化財センター調査報告書 第283集

美通遺跡D区

一般国道139号（都留バイパス）改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

印刷日 2012年3月23日

発行日 2012年3月23日

編集 山梨県埋蔵文化財センター

山梨県甲府市下曾根町923

TEL 055-266-3016

発行 山梨県教育委員会

国土交通省関東地方整備局

印刷 株式会社 少國民社